

文楽座人形淨瑠璃

吉例盆替り興行



文楽座 四橋

一部 金十五銭

乍憚口上

秋涼やう／＼に相催し朝夕は誠に凌ぎよく相成申候處
市中皆々様には愈々御機嫌の躰を拜し恭悦申上候扱て當
座に於ては新秋とゞもに更に一段の躍進陣を進め一座の
更生を直指して潑刺たる内容を含め御期待の如く全座員
の大熱演を以てお目見得仕る可く殊に今般當座に於ける
最初の上演として大阪毎日新聞連載の「東海美女傳」を
淨曲化し現代の大衆小説と傳統の文樂とが茲に渾然たる
融合を示し御觀客様にお珍らしき一段を提供致す事と相
成申候次第何卒一座の努力に對して應分の御批評を賜り
ますやう御願申上げ候尙一座連中には悉く得意の箴り役
を以て當座獨特の氣分を充實いたす可く候間相變らず御
來場の程伏て御願奉申上候

月 日

四ッ橋

文 樂 座 敬 白

昭和十一年九月十二日 初日

毎日 午後三時開演
初日 午後二時開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金二圓七十錢
(お座席五十錢上り)
二等席 御一名 金一圓二十錢
三等席 御一名 金七十錢

一等椅子席 五日前より
二等お座席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南(四)四七一 番
專用電話
一般御用 南(四)三〇三二番
の電話 南(四)三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、
草履はそのまゝ御入場出來ますから
なるべく靴、草履でお越を願ひます

文樂座人形淨瑠璃

吉例盆替り興行

大阪毎日新聞社所載
主役 榎風原作
大西利夫作詞並脚色
どう

豊澤 暖助 作曲
松田 種次 監修
芳生 照明

東

海

美

女

傳

三時より四時二十分まで

あさひの

西來寺の段より
鷹野の段まで

幕間 十分

玉

藻

前

旭

袂

四時三十分より五時五十五分まで

あさひの

右大臣道春館の段

幕間 十五分

極

彩

色

娘

扇

六時十分より八時十分まで

あさひの

秘水代漬の段より
増井の段まで

幕間 十分

増補

須磨

都源

平躰

躰

八時二十分より九時五十分まで

あさひの

扇屋内より
五條橋の段

幕間 十分

關

取

千

兩

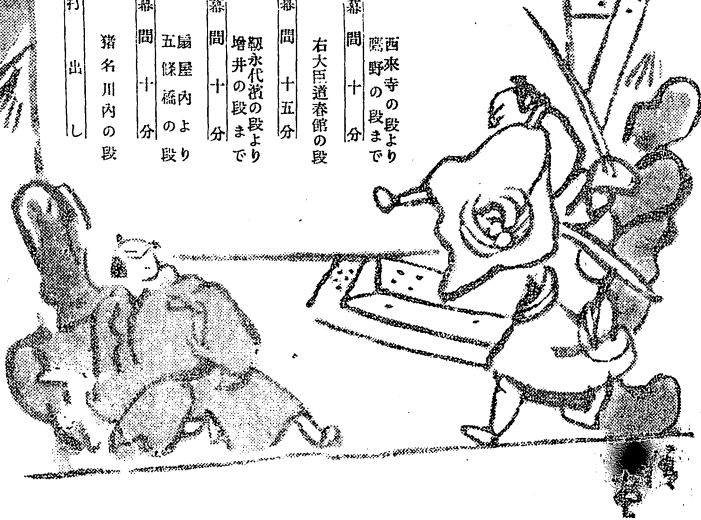
幟

十時より十時四十分まで

あさひの

猪名川内の段

打出 し





大阪毎日新聞所載
大西利夫作詞並ニ脚色
松田種次郎作曲
お田芳生監明

東海美女傳

西來寺の段

西來寺の段 鷹野の段

竹本文字太夫
豊澤廣助
鶴澤寛市
鶴澤可太郎
鶴澤友作

人形

百姓與作の女房 桐竹門造
娘おつる 桐竹紋十郎
偽翁上人 吉田玉次郎
築山御前 桐竹紋太郎
野中三五郎 吉田玉市
一夢齋老人 吉田玉藏
實ハ花澤主水

百姓與作夫婦に育てられたお鶴は今日十七回忌に始めて聞かされた身上お鶴の母は家康の先妻であつたが家康一流の我が身の出世に義理人情を顧みない犠牲となつて殺されたのである。お鶴は今川義元の妹の子で家康に重なる怨みがある。さて復讐と決意したものゝ愈々となれば流石は女、殊に父に向つてどうして刃が取れやう。お鶴はこの苦しいジレンマに陥入つて惱んだ揚句遂に斷念する。

(床本) 西來寺の段

へ四つの海。浪も静かに平ぎて。君萬歳の時つ風。枝もならさぬ濱松や。西來寺とて名にしあふ。伽藍の隅に入しらぬ。無縁の墓を前にして。今日しもつとむる十七年忌。施主といふにも事足らぬ。見るかげもなき百姓にて。與作といへる夫婦もの。娘お鶴をともしなひて。苔を拂ひてぬかづくさへ。似合しからぬ五輪の塔。娘お鶴は不審して。もしとゝさんえこのお墓は今日までに、まだ一べんもまゐつた事のない佛さま、一体どなたでござんすえ。その不審は尤もなれど。不思議な縁でわし家とはきつてもきれぬ仲になつた。といふのでさへが勿体ない。やんごとな

お方ぢやが。へ詳しい事は後ほどと言葉少なもよしありげに、つばやく所へ僞翁上人。年はいくつと白髭のみるからけだかき法衣の袖、威儀を正して回向ある。願以此功德。平等施一切。同發菩提心。往生安樂國。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛とねんごろに。とむらひたまへば與作夫婦お鶴も共に一禮なし。方丈さまには御老体をわざわざの御回向。有難うござりました。結構な御經文をいたゞいて、嘸かし佛もうかみませう。左様なれば私どもは形ばかりのお齋の用意。一足お先へ御免下され。へとゆかんとするを娘のお鶴。その用事なら私の役父さんも母さんも、年よりの冷水しごと。あとでまた腰が痛いといはうでの、ほゝゝゝゝゝゝゝ

まア若い者に任せておかしやんせ。とへ氣輕にかけ出すうしろより。僞翁上人とどめ給ひ。あゝこれまちやれ。今日の齋は與作どの夫婦の、皺くちやな手づかみ料理が何よりの馳走。そなたには愚僧から、一寸ばかり話したい事もあれば、あとにのこつてきかつしやれ。へといふに與作も尾について。さうともへ、法事にはお談義はつきもの、耳の遠いわしらの代りに、そなたとつくりきいておきや。わしと婆さまは、一足先にお手々つないで仲ように、極樂淨土へ道行と。へおどけまじりに走りゆくあとにお鶴は迷惑顔。方丈様。お談義とはどんな事。早うきかして下さりませへといふ顔つくく。僞翁上人さればとよ。けふ改まつていふ事な

らねど、そなたも今年は十七の。歳の數にあたりし年回。よきほど思ふ故。そなたの素性あかし置く。人までそなたを與作夫婦の娘といふたはいつはりにてへまことは今日回向の佛。塔婆のおもてに書き記す。西光院殿。月秋天大禪定尼。これこそなたの親なるぞへときいてお鶴はあきれ顔。方丈様とした事が、何を仰りますやら。人をなぶるのもよい加減になさりませ。イヤなぶるのでは更々ない。仔細をいはねばわかるまいが、今を去ること十七年前。この寺近く。佐鳴湖のほとりにて。非業の最後を遂げられし、築山御前の忘れ形見を、愚僧ひそかに預りしが。寺で子どもは育てられず。幸ひ出入の與作夫婦の。律氣をたのみ娘

にして。育てゝもらうたのが今のそなたへときいてお鶴はわが耳を、疑ふばかりにうち驚き。そりやまアほんの事かいな。オ、疑ふは尤もなれど、五戎を守る愚僧の言葉にうそいつはりのあるべきか。後日の證據に残しおかれしかたみもあり。受取られよ。と袖の下。とり出す錦の袋には、三つ葉葵の紋ちらし。墨塗さやの懐劍一ふり。へその緒までもそへたりけり。お鶴は夢に夢見る心地。築山御前と仰るは、人の話にきいて知る。徳川家康公の元の御臺所。晋にきこえしあばづれものとおのが身分をかへり見ず、男ぐるひの亂行盡し。殺されなされたときゝますが、さては私はさうした人の子でござりまするか。そしてまア父は

何者。そんな女の子なら、どうせ誰の胤とも知れぬ、父なし子でござりませう。涙ぐみてぞさしうつむく。あゝこれ。尾鰭のついた世間の噂にとりとめがあらうかいの。まことの事は愚僧が知る。そなたの母を不貞の女と、いひふらせしはわけあつての事。築山御前はもと今川義元が妹の子にて。徳川の家もまた今川に恩顧をうけし事なれば、家康義元は一家に等しき仲なるに、織田信長天下に威勢をはるに及び。家康忽ち信長に加擔し。今川の家亡ぶるを、見殺しにしたる不人情さ。腹にすへかね築山殿は夫家康の心にさからひ、みづから信長をうち亡ぼさむと。種々なる企なすことを、聞き知つた信長。築山をなきものにせよと。頻り

に家康に迫りしかば。家のためには肉親のなさけも知らぬ家康公。野中三五郎重政に申し含め。遂に失ひまゐらせしが、さすがに世間の思わくを恥ぢ。築山殿に惡名つけ。専ら世間にふれさせたり。而もそなたは誰あらう。まぎれもなき家康の胤なれど、私慾のためにはわが子さへ。殺しかねまじき様子をば、かねてさつていち早く。そなたを愚僧に預けられしは、母のなさけと思ふべし。へ初めてあかす事なりゆき。聽にお鶴はかなしきより。先立つものは口惜しさの。涙に聲をふるはせて。思へばにつくき家康め。どうぞしやうはあるまいか。と杖をかねでなげくをば。僞翁上人察しやり。そなたのうらむは道理なれど。何をいふて

も家康公は、今では日本國中に、とぶ鳥落す大將軍。生れはともあれ今の身で、そなたが何ぼうあがいてもかなはぬ事とあきらめて、唯大切な母御の菩提へ今日よりは一しほに心にかけて申はるべし。何かの事は庫裡へまゐり。くはしくお話しすべし。さ。一緒にござれ。へと促すを。お鶴はなほも立ちやらず。あんまり思ひがけないお話を承り、何が何やらわかりませぬ。暫らくこゝに獨りゐて考へ事がしたうござります。コレ何をいふ。若い女が墓の前で。考へ事などおだやかならぬ。それにどうやら急にあやしい空模様、今にも一ふりしさうな様子。考へ事は後日にしやれ。イエゝ知らぬうちならいざ知らず。かうしてこのお墓が

母さまときいたからは。尋常のおまゐりでは氣がすみませぬ。も一度念入りにおがんでゆきたうござりますと、いふに上人も得心なし。いかさまそれも尤もぢや。然らば愚僧は先にまゐる。はやう拜んで戻らしやれ興作どの夫婦もさぞやまちなねつらん、早うきやれといひすて。偽翁は庫裡に急がる。あとにお鶴はたゞ一人。石塔のおもてつくぐと。見れども見えぬ生みの親。面影さへも定めなき。世のうつろひを身一つに。うけてこし方ゆく末の。思ひ果しもなく涙。心ばかりの空さへも。ふたがる雲のただならぬ。ゆきかひ見する雨もよひ。一粒二粒三つ四粒いつかふり出すその中に。お鶴は墓前にぬかづきて。身じろぎもせずぬ

れゐたり、忽ち天の一角よりどつとよせくる怪風に。一天見る見る晦暝し。雨は篠をば束ぬる如く。大地を叩き轟々と。あやめもわかずふりしける。紫電一閃。虚空を貫くと見れば。殷々たる雷鳴。地軸も裂けよとどろく中に、こはこれあやしき人の影。姿かたちもくらげなす。たゞよひうかぶとおぼえしが、これや心のまよひなる。妄執の雲いつしかとはれてかがやく秋の空。すみでぞわたる雁の聲。こは佐鳴の湖に。舟をうかめてゆきかひの。人なき汀におりたちて。由ありげなる二人づれ。柳の眉のあと青き。みどりの色は春をこそ。はやすぎたれど葉櫻のかほりをのこす花の顔。やんごとなげなる上臈の。あとよりつゞき従ふ

は。肩ひぢいかる荒男。贅固の武士とは知られけり。贅固はつくばひ一體なし。これまでは舟にて渡りまゐりしが。これより先は濱松まで。陸路もさほど遠からず。御乗物はこの先に。手廻し待たせてござりますれば。恐れながら暫くは。おひろひ下しおかれたしへと懇懇に。申あぐれば鷹揚に。うなづき歩む後ろより。何思ひけむ件の武士。腰なる一刀ぬくよりも。築山殿御かくごと。いひも終らず肩先に。ざつくとばかりきりつくれば。うんととのつにそりかへる。嵩にかゝつて二の太刀を。大上段にふりかぶる。下よりしほる必死の聲。ヤアおのれ野中三五郎。何うらみあつて妾を手にかくるぞ。家臣たる身でありながら。主を斬るとは

何たる無道。仔細をいへへとねめつくれば。三五郎とびしさり、はア。恐れ入つたる事なれど。事の仔細は拙者より。あなたにおぼえざる筈何事も家康公の御さしづ。平におゆるしたまはれ。とへきくに怒りのまなじりを。くわつと見ひらき築山御前。さては義理も情もわきまへなき家康が所業にてありつるよな。かゝる事のあらむとは。かねて期したる事ながら。まさかまさかと思ひしにへあな口惜しき限りやと。胸かきむしり身を悶へ。なげきたまふぞ道理なる。野中三五郎傍により。御無念御尤もとは存ずれど。大義親を滅すといふ事あり。何事も徳川のお家のため。はや／＼觀念あるべし。とへ立ちかゝる袖をとらへ。オ、此期に及

んで何の未練をいふべきぞ。さりながら妾が今生にたゞ一つの遺言。そちから家康に傳へてくれまいか。ナニ、御遺言とな。異つて候ふ。はや／＼仰せ下さるべし。と。へさしよする耳もとに。血を吐く聲は。うらめしい。ナニ。うらめしいとは。オ、その一言こそ妾の遺言。たしかに申せ。と。へいふかと思れば。はつたと野中をにらみつく。悪鬼の形相たまりかね。三五郎は一打に。御台の首をうち落せば。恐ろしや。天日にはかに光を消し。漆の如き黒雲は。四界をこめてねば玉の。やみの底よりまきあがる。嵐は紅蓮の焰と化し。天に冲して炎々たり。忽ち起る大震動。百雷一時になりはためき。天地もくづれ落ちしよと、おぼえてハッと

氣のつけば、こはこれ南柯の夢心地
お鶴は石に枕して。まだみもしらが
の翁の手に。かい抱かれてぞゐたり
ける。オ、娘御。氣がつかれたか。
さい前からの雷雨にうたれ。もしや
死んだかと介抱せしが。別條なくて
重疊々々。そしてそなたは何處の何
者。どうしてこゝへ來りしぞ。と、へ
とはれてお鶴は面はゆげに。私はこ
の界限にすむ興作と申すものゝ娘で
ござりまするが。今年年回のこのお
墓拜んでゐるうちどうした事やら。
ついうとくゝとしましたが。雨も雷
も何も知らず。まア怖ろしい。夢を
見ました。と、へあたりを見まはす面
ざしを。つくゝながめて不審顔。
翁は聲をひそめつつ。ハテ今日この
墓の年回を知るからには。築山御前

に所縁のものか。さう申せば娘の面
ざし。どこやら御台に似通ふたが。
氣のせいではあるまいかと。と、へつぶ
やくをきゝとがめ。エ、何と仰りま
す。この墓を築山御前と仰るからは
お前様もゆかりのお方でござります
るか。エ、さういふわけではなけれ
ども。それでもわし面ざしが、御台
に似たと仰つたは。まんざら知らぬ
お方でもござりますまい。さア。さ
ういはれては返答に困る仔細もあれ
ど。それよりもそちこそ築山殿に何
のゆかり。それから先にきかせてく
りやれへきかれてお鶴はうちしほれ
そのゆかりこそ悲しいゆかり。けふ
初めてきいた事ながら。築山殿の忘
れがたみでござりますといなア。な
なんといやる。そんならもしや鶴姫

どのとはいはれぬか。これはしたり
姫などといはれる身ではござりませ
ぬが、正しくわが名はお鶴でござり
まする。してまたそれを御存じのお
前さまは。オ、何をかくさう。われ
こそ築山殿の里方なる、今川家の軍
士花澤主水と申すもの。今川の家に
は遺恨重なる徳川家康。うちとつて
主君の妾執。晴さむものとつけねら
ひしが。今を盛りの惡運強く。瘦老
人のわれらでは近づく事さへ意にか
なはずへむなしく老いて今ははや。
隠者となりて世をのがれ。一夢齋と
は名乗るなり。今日築山御前の十七
回忌。世を憚る身ながらも。參詣せ
んと來て見れば。思ひの外なこの仕
末。その昔。御台には鶴姫といふ忘
れがたみあり。何方にかかくれ居る

鷹野の段

こし元おつる 竹本 鍛太夫

一夢齋 竹本 長尾太夫

こし元 竹本 播路太夫

徳川家康 竹本 大隅太夫

鶴澤 道八

人形

徳川家康 吉田 榮三

こし元おつる 桐竹 紋十郎

一夢齋老人 吉田 玉藏

實ハ花澤主水

こし元 大ぜい

曲者 大ぜい

とは傳へきゝ居りしが、まさかかやうな所にて。面會せんとは思ひもよらず。さてく不思議な出會ぞ。と

きくに鶴は勇み立ち。これといふも亡き母様の御ひきあはせ。花澤さま。お願でござります。これからは私を弟子にして劍術教へて下さりませ。コレはしたり、女の身で劍術習ふて何する氣ぞ。ハテ知れた事。怨重なる徳川家康。女ながらも一念にて。やはかうたいでおくべきかと。齒がみをなしていきどほれば。ア、これ。めつたな事はいふまいぞ。うかつな事を口外して、人にきかれては一大事。何かの事はわがくれ家にてつくはしく問はむ問はれもせむいざまづござれと手をとて。ゆく

衛いづくと白雲の。立ちとぞすなるかくれ里。石に枕し谷水の。流れに口やそゝぐらむ。

(床本) 鷹野の段

へこの世をばわが世とぞ思ふ望月を。東の空をながめつゝ。駿府の城におり位する。前の征夷大將軍家康公。今大御所と敬はれ。百官朝暮に伺候する。威勢のほどこそ目ざましけれ。けふは鷹野の催とて。家中は更なり大奥の。女どもまで引具して行列美々しくねり出す。中食の休息は龍爪山の麓なる。瀬名の代官。庵原半左衛門がやしきとて。既に定め席ごしらへ。上を下なる騒ぎのうち。とりわけはでにきこえしは。と

ころも奥庭大庭の女中たまりと知られけり。お鷹野と云ふものは。何度見ても勇ましいもの。おかげでわれらもよい氣保養。久しぶりの野遊びで。生命が十年のびました。と、白髪まじりの老女中。腰をさすつてのたまへば、隣りの褥でぶつとふき出し。うそを仰りませ。野遊びより夜あそびのお好きなあなた様。なれぬ野がけで腰を痛めうより。双六盤のにらめくら。勝負の賭してゐる方が何ぼう面白いとは何故仰らぬ。エ、埒もない。そんな事大きい驛でいふものではないわいの。それはよいが上様が今朝仰つたのは。今日の中食にはよいものを見物させてやるとの事であつたが。そりや一体何である早う見たいものじゃ。あれまああな

たも御推の悪い。上様がよいと仰るものは大がいに知れてある。それ。またどこぞの田舎家に。若いきれいな娘でもゐるのでござりませうわいな。さう。若い娘と云へばこの程上つたお鶴といふはしため。近頃にもちよつとな、きれいな娘ではござりませぬか。さればいの。今にまた上様がちよつかいをなされよう。と、へ口に關所のありやなし。よしなし事のとめどなく。さへずりかはす折からに。大御所様のおいり。へとて、いと嚴かにふれだせば。忽ちひとつと靜まりて。しはぶき一つせざりけり。家康公は寛々と。床几に腰をかけたまひ。今日の鷹野。女共には嘸かし大儀。恩さみに約束の面白いものはおもての方に名主の源兵衛が用意致

し居れば。一同見物致すがよい。みどもはこれにて暫く休息。給仕には近頃新参のはした女。お鶴とか申す由。こゝへ呼べとありければ。そりやこそ持病の始まりと眠ひき袖ひき笑をこらへ。長居は無用と座を外すお召しの上意かしこまり。お鶴はなりふりしとやかに。御前にまかりいづみなる。信田の森のそれならで。うらみの色を顔にも出さず。恐れ入つてぞ控へたる。お鶴とやらはそのほか。旅中の無禮講。遠慮はいらぬ近うくと。へ招かれて。はい。と。へ會釋も主従の禮をつくして振舞へども。つながる血すじ父と子の。へだては近き九寸五分。帯にはさみし母のかたみ。隙だにあらば一つきと。心にきめてにぢりよる。おゝ見るか

らにしほらしいよき女。年はいくつ
生國はいづこと。へやさしき御鏡に
頭を下げ。年は十九。生れは遠州。
濱松在にござります。ほう濱松と
いへば身が故郷同然。若い折が思ひ
出される。武田の勢に圍まれて。既
に落城も致すべきを。織田殿に助け
られ。生命からく逃げ出した事も
あつたものぢや。エ。織田殿と仰り
まするは信長公にござりまするか。
ブム。そちや信長公をよい人ぢやと
思ふか。悪い人ぢやと思ふか。あい
それは。あの、我君様をお助けなさ
れたお方なら。よい人ぢやと思ひま
する。はゝゝさかしい事をいふやつ
ぢや。親はあるか。エ、親は。サア
兩親は生きてゐるか。お鶴ははたと
胸をつき。何といらへもせぐり來る

なみだをこらへ今更に、ぢつと見あ
ぐる父の顔。ござりませぬ。と、口
には云へど目の前に。笑をたゝへて
座ります。君こそわが父上と。思
へばにぶる心の切先。家康公は氣も
つかず。ほう親がないとはふびんな
奴。兄弟はあるか。ござりませぬ。
ハテ親も兄弟もなうては何ぼうにも
心細からう。あい。さてさて笑止な
その心細さは家康にもおぼえがある
六つの歳に今川の人質となり。それ
から十年。尾張駿河を流浪して。人
並には生長はしたけれども。つひに
親の慈悲は知らず。兄弟の情けはお
ぼえず。他人の中の氣苦勞を。つぶ
さになめて暮せしが、艱難汝を玉に
すとかや。わが今日の身の上は。子
供心にしみこみし。たゞ勸忍のたま

ものぞ。さはあれわれは男。そなた
は女。百年の苦樂。他人によるとい
ふからは。身をつゝしみに。我意をす
て。夫をもたば貞女の名、子どもを
生まば賢母のほまれ。後の代までも
のこせよと。かんでふくめる教訓に
お鶴はつくづく身にしみて。げにや
慈悲ある親身の言葉。うれしといふ
もあだにして。涙にくるゝ外ぞなき
イヤもう老人の愚痴談義に。思ひの
外に休息が長びいた。そちも迷わく
諸士もさぞかし待ちかねつらん。さ
らばゆかん。へと、家康公。やおら床
几を離れたまひ。奥に入らんとする
ところを。お鶴ははつと氣を引立て
それはそれ。これはこれ。今日の前
に母のかたき。この機外さばいつの
日か。本望とぐる折やあらん。おか

くどあれやも口の内。家康公のうしろより。たゞ一突きと懐劍の。柄もとしつかとつかみしが。とたんにふりむく家康公。コレ鶴。明日よりは身分を引あげ、身がそば近う使うてとらす。随分忠義をつくせよとへつひにかはらぬ温容に。さすがお鶴も五體すくみ。手足わな／＼おのゝきつゝ。うなだれてこそ居たりけれ。折から俄かに騒がしき。人の足音きこゆるに。何事ならむと見てあればおちこち方の木影より。いつのまにかは忍びけむ。覆面無頼の野武士ども、物をも云はずぬきつれて。大御所めがけて斬りかゝれば。お鶴はあつとうち驚き。そこに有りあふ穂長槍。しごくもおそし遮二無二に。つき立てつき立てたちむかふ。家康公

はそのひまに早くものがれて入り給ふを。のがさじものをと追ひかくる多勢を遮る無勢のお鶴。女ながらも一念に。きたへし腕の見せどころ縦横無盡につきまくれば。さすがに荒き野武士らも。雲をかすみと逃げ散つたり。お鶴はホツと息をつき。あたりを見まはすうしろより。ぬつと出たる覆面の。武士一人立はだかり。お鶴どの。へよぶ聲も。低く忍びの風態に。お鶴はすばやく身構へしおのれ、まだあるかと。つき出す槍先身をかはし。覆面ちやつとり除けば。やあ、あなたは一夢齋どの。シイツお鶴どの。そなた。なぜ家康をうたなんだ。えゝ。イヤサ折角身どもが心づくしの野武士どもを、なぜ追ひちらした。と、へいはれてお鶴

はと胸つき。オ、さうぢや。わしは家康を討つのであつたものを。なんでこんな氣になつた。こりやま一體どうせうぞと。にはかに氣のつくおろ／＼聲。われとあきるゝばかりなり。一夢齋嘆息なし。あゝ、げに人の勢旺んなる時は天を制すとかや家康の命。今こそわが手の中にありと。正におぼへし今日でさへ。かく打もらせしはよく／＼の事。われ等時を得ざる者が何程齷齪致さうとて所詮勝手のなき大望。今更ながらさつたとへいふにお鶴もうちなづき。さう仰れば私も。初子のさつた親子のなさけ。かたきと思ふ家康も。面と向へば何事ぞ。唯なつかしい父さまと。思ふ心が先に立ち。母のかたきと知りながら。刃のたゝぬ

浅ましき。御推なされて下さりませと。なげくもいと哀れなり。一夢齋も心をきはめ。もはやかくなる上からは。そなたもさつばり心をあらため。敵うちなど思はれな。拙者もとの山籠り。縁があらば又會ひ申さう。さらばでござる。とゆかんとするを。お鶴はひきとめ。まあ待つて下さりませ。父への情けにひかされて。母の敵をうちやめては。何ぼうにも申譯のない私。もうこの上は望もすてます。慾もすてます。そして生涯世を捨てゝ。終るつもりでござります故。一しよにおつれ下さりませと。眞實面にあらはせば。一夢齋も心を推し。さほど切なく思ふなら。後日の事は後日として。ともかく共々この場をのがれ。暫く世間に

身をかきさむへかくと心をきはみし上は。さらでも危きこのあたりに。一刻の猶豫もなるまじと。はや立ちかゝるうしろより。兩人待て。と呼ぶ聲に。思はずぎよつと見かへれば思ひがけなき家康公。泰然として立ちたまふ。今川の軍士花澤主水、久しいの。築山御前の忘れがたみ。鶴姫の行末頼むぞと。云はれてびつくり一夢齋。ヤア、そんなら汝は何事も。オ、知らないでか。姫の面影。親子の血筋は争へず。此間よりはしためとなり。身をつけねらふ様子こそあやしと思ひためせしが、ひそかに見つけし所持の懐劍。ヤア。思へばふびんの娘よな。兄弟縁者悉く。一國一城にゆかりを持ち、今を時めくその中に。草莽に唯一人捨てられ

て。苦勞致すも宿世の惡業。築山の最後うらみに思ふは道理なれども。うき世の事はうらおもて。いろ／＼切なる仔細もあり。何れはわかる時もあらむへいづくの里にかくるゝとも。随分堅固に身をいとひ。最前よそながら。さとせしめしめ。肝に銘じて忘るゝな。主水、姫を頼むぞと。たゞ一言に千萬の思をこめし言の葉を。きくにお鶴はこらへかねわつと涙のせきもきれ。きるともきれぬ恩愛の。きづなからむ敵味方二すじ道を一すじに。なすよしもなきうきわかれ。行衛も知らずなりにけり。



玉藻前旭袂

右大臣道春館の段

右大臣道春館の段

中 竹本 綴太夫
豊澤 新左衛門
切 竹本 土佐太夫
野澤 吉兵衛

人形

驚塚金藤次 吉田 玉次郎
采女之助 吉田 光之助
萩の方 吉田 小兵吉
娘桂 吉田 文五郎
娘初花 桐竹 紋十郎
中納言重久 吉田 榮三郎
こし元 大ぜい

寶曆元年正月豊竹座に上演されたもので殺生石の傳説を題材とし、鳥羽帝の御兄薄雲王子の反逆と妖狐の化現玉藻前とを取吉せて趣向を凝らしたる作で五段のものでこの段は三つ目で俗に(玉三)と稱されてゐます。安田蛙桂が立作者で淺田一鳥浪岡橋平が合作してゐます。この淨瑠璃の内容を申しますと右大臣道春の娘桂姫を薄雲王子が懸想して待妃に迎へようとしませんが桂姫には安部采女之助といふ侍と想思の仲にあるので請入れませぬ、王子は眷戀の情に馳れて腹臣の金藤治を遣はして、桂姫

が應じなければ家寶の名劍獅子王を出せと難題を言かけます。獅子王の名劍は既に何者かに盗まれてゐるので詮方なく桂姫の首を遣る破目になつたが桂姫は後室萩の方が實子ではなく五條坂で拾ふた捨子であるので心が咎めて討つ事が出来ず、妹の初花を身替りに討たうとしたが追に之れも恩愛の絆にひかれて刃が鈍るので双六盤を姉妹に侑めて勝負をさせて何れかを討たうと苦肉の策を思ひつきます。姉妹は互に死を譲りあひましたが遂に桂姫が勝つて、初花姫が討たれる事になり、首をさし延べましたが金藤治は意外にも勝つた桂姫の首を討落しましたので萩の方は怒つて驚塚に詰ります。後室に懇と斬れた、金藤治は初めて本心を明し

桂姫の實父であることゝ名劍を盗んだのも自分であると苦しい息の下から自白します。勅使が来て、妹の初花姫の歌才が天聴に達し更衣の官に召抱へられるといふ筋合で御座居ます。この(玉三)は土佐太夫が十八番の咽喉をきかせます。古雅な郷土香の秀れた逸品で御座ゐます。

(床本) 道春館の段

M 早夕陽も傾きて、無常を告ぐる鐘の音も、いとゞ淋しき黄昏や、間毎を照す銀燭の光燦ゆき、廣書院。程も有らせず入来る鴛塚金藤治秀國素袍の肩肘いかつ氣に、上座にこそは押直る。斯と知らせに館の後室、衣紋正しく出迎ひ。詞御上使様には御苦勞千萬、皇子様より御説の趣

仰せ聞けられ下さりませと、辭讓の詞に一揖し。詞上意の次第餘の儀にあらず、皇子様豫々御所望有し獅子玉の劍、今日中に差上ぐるか、左無くば娘桂姫が首計つて渡さるゝか二つに一つの御返答サ、只今仰せ聞けられよ。ハアコハ存じがけ無き御難題、其劍は紛夫致し、所々方々と尋ねれども、今に於て行き方知れず今暫しの御容赦を。ア、イヤ夫りや成らぬ、皇子御心を掛られし桂姫、度々催促有ると雖も、兎や角と言延し、打捨て置かるゝ事、貴族の威勢鈍きに似たりと、以ての外御憤り劍が無くば桂姫、首にして御渡し成されと、退引爲せぬ釘鏝。胸にひつしと萩の方、途方涙に暮れ給ふ。後に始終桂姫、此方の間には初花が

忍んで様子立聞くとも知らず御臺は涙を拂ひ。とても持詰めに、成る上は孰れ逃れぬ娘の命、未練の申事ながら、一通り聞いて給へ。詞過去り給ふ夫道春、夫婦の中に子無きを憂ひ清水の邊なる、三神の社へ立願込め三七日の參籠、其歸るさに産子の泣聲、肌に添しは雌龍の鰐形、由緒有る人の胤ならん、神の御告と連れ歸り、育て上しは桂姫、間も無く設しアノ初花、右と左に月花と、詠め暮せし姉妹を、是非に一人は無い命、殺さしや成ね品と成り、せめて夫が在まさは、問談合を有らう物、何と言ふても身を悔みたる御涙、止め兼てぞ見上げるが、思案極めて顔を上げ、杖柱とも思ふ姉妹勝り劣りは無けれど、詞劍で殺さば三神への恐れ

と言ひ、殊に義理ある姉妹、愛の道理を汲分て、妹の初花を代りに立て給はらば、此上も無き御情と、云はせも果す聲荒らげ。詞ム、スリヤ三神の咎は恐れ、神の御末の皇子の仰は御用ゐは成れぬか、よし夫は兎も有れ上意を受た某に、身代り杯とは思ひも寄らず無益の間答聞く耳持ぬ、サア只今と詰寄つていつかな挽ぬ其顔色、叶はぬ所と胸を据え。イヤのう御上使、武士は物哀れを知ると言ふ。自らが一つの願ひはコレ此双六盤、二人の命を天道の指圖に任せ、負たる方の首を討たば、せめては夫を定業と、諦めらるゝ事も有る、何卒此儀を御了簡、コレ慈悲じや、情じや聞分てと、義理と恩愛二筋に、傳ふ涙は雨や小雨、身に振掛

る桂姫、母の情、有難さ、御慈悲と云ふも口籠る、振る袂に白雨の、晴間は更に見えざしき。詞エ、様々のよまひごと、見物爲るもまどろしけれど、ハテ何と爲う是非が無い、サきりくとお始め成れ、が勝負が付くが直に寂滅。ヲ、成程々々、夫と明さば女氣の、歎きに心掻曇り、取亂しては詮も無し、只餘所ながら暇乞ひ、一思ひにと云さして、詞泣々取出す、合用意の褥、四隅には冷泉立る橘の一本も、露を待間や好嬌の哀れ果敢なき有様を、几帳の影に采女之助、斯る難儀も我故と、思へど出るにも出られぬ時宣、千々に心を苦しめる。思ひは同じ母親が、是が冥途の使かと、思へどいと急き上す。胸は子故の五月闇、文目も分ぬ

曇り聲。詞娘々と呼出す、アイト返事を一様に、斯とは誰も白小袖、死出の晴着と姉妹が、姿も對の雪柳、萎れ出たる屢所の道、羊の歩みたどたと、最後の坐にぞ押直る。一目見るより萩の方、扱は様子を聞しかと、先を取られて今更らに、兎角答も涙なる母の歎きに掻曇る、心は月の桂姫、漸々に顔を上。詞委細の様子は先刻にから、残らず開いてをりました。塀放れし時鳥、子で子に有らぬ自らを、此年月の御養育、未だ其上に妹まで、自らを助けんと、様々の心遣ひ、思ひ廻せば廻す程。空恐ろしい身の冥加、胸に迫つて一言も、御禮は口へは出ぬわいなア、斯様愛目を見せますも、皆自らが徒から、とても叶はぬ戀合故と、覺悟

は決して居りました、露塵御恩を送り
も爲ず、先立まする不孝の罪、御赦
し成れて下されませ。詞産の父上母
様は、何處に何して在るやら、命の
際に只一目、逢ふて死度い、是ばつ
かりがと言さして、聲疊らせば初花
姫なう、曲も無い其お詞、縱令何の
胤なりとも、妾が爲には大事の姉様
御前は殺さぬ自らを、イヤ妾と、死
を爭ひし姉妹の、心根不慮と母親は
何れを其と分衆る、胸は泪の三瀬川
身も浮くばかり歎きしや、左あらぬ
體にならぬ。詞御上使への御馳走に
日頃手練の双六を、お目に掛きや、
一世一度の晴業なれば二人とも、大
事に掛け、何方も負て給んなやと、
割ては云はぬ親心、傍の盤を引寄せ
て、是が此世の別れかと、思へば直

す手も撓く、斯る例も綾錦。合袋の
紐も疾々と、合賽の河原を此世か
ら、合積も石數も姉妹の、年も重目
に持つ涙、互に筒を取交し、指手引
手も端手ならず、合切つ切れつ修羅
道の、苦しみ受ん悲しやと、思へば
筒も手も戦ひ、亂れもどろの石使ひ
姉をかばへば妹を、助けん物と双方
が、重一六五二四三、果し無けれ
ば氣を苛ち。擔エ、ぐづぐづと埒の
明ぬ長詮義、早く勝負を付召れ、早
くくと怒塚が、迫み立れば姉妹
も、爰ぞ一生懸命と、心盡しの盤の
面、母は胸まで突掛くゝる涙存込み
くゝて、背ける顔に露時雨、乞目を
振し姉よりも、妹が心の嬉しさ苦
しさ。サア、姉様が御勝ち成れた
と、首指延て覺悟の體。見るに母親

保ち兼ね。わつとばかりに泣沈む。
刀すらりと金藤治。詞勝負は見えた
觀念と、閃めく電光姉妹の、首は前
にぞ落にける。ノウ悲しやと、初花
姫、敢なき體に取付て、悲歎の涙
果しなく、泣目を拂ひ救の方、上使
の側に詰寄つて。詞ヤア狼狽たか金
藤治、勝負に勝た姉妹、何故切つた
何故殺した。夫と悟つて身代りと、
初花が志し、水の泡と成つたのも
皆其方が無得心、謀られたか口惜い
と、身を戦はして腹立ち涙、上見ぬ
怒塚せうら笑ひ。詞ハ、しやら
臭い咎め立て、勝負に勝ふが勝まい
が、仰せを受た桂娘、首討たが何誤
り、皇子のお心背く旁、悪く身動
き召さると、何奴此奴の用捨は致さ
ぬ、退込てお居遣れと、權威を甲に

傍若無人。振袖引裂首押包み、脱散して立出る。御臺は赫と急上げ給ひ詞ヤア、過言なり金藤治、女と思ひ侮つての雜言無禮、右大臣道春が妻其所動くなと裾引上げ、長押の長刀追取て、石突丁と庭の面、八双三段水車。合母様は何事と、止め隔つる初花姫、邪魔仕遣んなと突退け剣退け、掬ふ長刀閃と返し、詞ヤア猪口才な腕立と、首を傍に驚塚が、秘術を盡す上段下段、合運の極か金藤治、肩先四五寸切下られ、思はず跡へたちく。付入る刃胸蹴落され、是はと駈寄る御臺の弱腰、どうと打付け動かせず、采女是にと飛んで出で、拔手も見せず驚塚が、脇腹ぐつと突込む白刃、急所の痛手にどつかと座す。起しも立ず聲荒らげ。

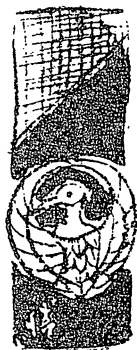
皇子に諂ひ惡事を勧め、人を損ふ獄卒め、思ひ知れやと刀の柄、決る腕首確乎と押ひ。ヤレ待て采女逸まるな。詞いさす仔細有り。詞ヤア此期に及んで何言議、血迷ふたか金藤治イヤ血迷ひもせず、後れもせぬ、先暫くと押止め、苦しき息を弗と次ぎ詞元某は東國武士、下野の國那須野の何某、故有つて所領に放れ當所に立越し漂ふ中、女房が初産、産下したは女の子、流浪の身の悲しさ、雌龍の鎧形相添て、五條坂の邊に捨て置きしが程無く妻も世を去りて、憂年月を送りし内、思はず皇子の見出しに預り當家に傳る獅子王の劍、盗取つて得爲なば、一廉の侍に取立んとの頼み、ハ、ア畏まつたと忍び入り、奪取つたはコレ此驚塚。ホ

、御驚きは御尤も、慾に目が暮れ惡人の、皇子に従ひ積惡無道、斯程邪見の心にも、忘れ難きは恩愛の、捨し娘は如何にぞと、案じ煩ふ折も折詞最前御臺の御物語、聞いた時の其嬉しさ、肉身のお子に代、かばひ給はるお慈悲心、有難しとも嬉しともなんと詞の有るべきぞ、須彌より高き御高恩、萬が一も報ぜずして、知らぬ事とは云ひながら、お家に仇する人で無し、譬へ鬼畜の身にもせよ、初花姫の御首に何と刃が當られう。御手に掛つて相果つるは、せめて、心の云譯ぞと先非を悔る身の懺悔、扱はとばかり母娘、采女の助立寄つて、詞ム、シテ御劍は御邊が所持爲らるゝか。ア、イヤ、獅子玉の御劍内侍所諸ともに皇子の館に隠し

有れば、術を以て取返されよ。サア
斯く物語れば劍の盜賊、何れも立寄
つて、成敗召れよと、透進々々首取
上げ 詞 コリヤ娘 コリヤ爺じやわや
い、爺じやわやい、何故物言ふては
呉ぬぞと、眠れる如き死顔を、打守
り 打守り、今端に成つて二親を、焦
れ慕ふた心根が、いちらしいやら不
思なやら、其時名乗るは安けれども
恩義の二字に擲まれて、ちつと答ゆ
る 辛抱は、熱鐵を呑む心地ぞや、燒
野の雉子夜の鶴、子を隣れまぬは無
しと聞く、可憐さを胸慾に、首打落
し 手柄顔、惨い親じやと冥途から、
怨み事の可愛やと、我を忘れし男泣
心を祭し萩の方、文も涙に正體無く
合一樹の影の雨宿り、一河の流れを
汲む人も、深い縁と聞く物を、葉の
上から育て上げ、手しほに掛た親じ
や者、可愛う無うて何とせう、十七

年の春秋が、一期の夢で有つたかと
返らぬ事を口説合立託し給へば初花
も、俱に涙に咽返り、詞 眞に夕べも
今朝までも斯うした理由が有らふと
は、神ならぬ身の情無い、何ぼ捨て
も子じや無いか、何故自らを切らな
んだ、今から誰とついまつや、琴の
復習や十種香、手向の種と成つたか
と、聲も惜まらず叫び泣、采女も追が
愛着の、義理の 柳恩愛の、血筋の
別れ墓塚が、鬼を欺く兩眼の、迷る
涙霏々々、四人が涙一時に、落て流
る、袖の海、膝は淵爲す如く也、斯
る折しも勅使と呼はる聲諸とも、中
納言重之卿、衣冠正しく入給へば、
思ひ掛無く人々は、敬ひ請じ奉る
重之優美の御聲にて。詞 曾比禁延に
て歌合せの折から、息女初花姫より
差上られし詠歌、みさび江に、底の
玉藻は亂るとも、知らるな人に深き

心をと有しを、帝御感斜ならず、御
賞美の餘り、女官の列に相加へ、玉
藻の前と改めて、召連來る可での
勅説。ヤアヤア仕丁ども、言付たる
品早く持て、アツと答て白臺に、更
衣の装束恭しく、御前に差出せば
はつと親子は有難涙、辭するは恐れ
と母親が、取々合着する五ツ衣、合
綾羅錦緋の袴、芙蓉の顔色婀娜女
の、四邊襟き其新粧ひ、采女之助は
突立上り、詞 我は是より姫が首、皇
子の館へ持参して、虚貨を以て御劍
を、奪返し奉らん、早御去ばと立
出る。コレなう暫と母親が、頸に名
殘の稱名は、直に黄泉の道標、合道
の案内と墓塚が刀を抜はかつくりと
脆くも枯る芭蕉葉の、露の玉藻も潤
ふ袖、絞り、合兼たる朝日の扶、雲
井の御所や、九重の大内山へと、三
重 別れゆく。



極彩色娘扇

韋永代演の段
天王寺村兵助内の段
増井の段

韋永代演の段

口

奥

竹本むら太夫
鶴澤友平
竹本源路太夫
鶴澤友衛門
豊竹駒太夫
鶴澤清二郎

人形

母 妙林 吉田小兵吉
朝日奈 藤兵衛 吉田玉藏
寺子屋兵助 吉田榮三
悴 筆松 桐竹紋司
女房おつる 桐竹紋太郎
仲 仕 大ぜい

これは近松半二、三好松洛、北密

後一、竹本三郎兵衛等の合作になる

淨瑠璃で、初演は寶曆十年七月の大

阪竹本座であります。お夏、清十郎

の世界に朝比奈藤兵衛と喧嘩屋五郎

衛門の出入をからませたもので、一

人の清十郎へ、五郎衛門はお夏、藤

兵衛はお品といふ娘を添はせやうと

するのが喧嘩の因になつてゐます。

此度上場の件は、藤兵衛が藝者に

なつたお品を身請の爲に二百兩の金

が要る、見るに見かねた母親妙林が

實子の兵助に才覺をたのむ、盲の兵

助は女房の苦衷に依て得た金を持參

する途中、藤兵衛に會つたが、一方

が盲、一方の藤兵衛が婢なので思掛

けない悲劇となり、遂に兵助は藤兵

衛の手にかゝつて殺される、といふ

誠に慘ましい一節であります。

(床本) 韋永代演の段

お鶴は跡にほつこりと、夫の心汲

取て、俱に思案に暮居たる。斯とは

知ず母お幸、納戸の口より立出て、

心の案じ脇道へ、そらさぬ顔で嫁お

鶴、へ入江の濱傳ひ、とほく歩む

俄目病六つ斗の稚子が手を引合て立

止り、コリヤ筆松よ、今日はいふ父

が手を引くれた。いにしなにはわ

れが欲しいと云ふ竹にさいた祭提燈買

てやる。アイアイ夫ならとつ様、小

いさゝぎ蠟燭も。ヲ、買って遣うく
あそこで聞た大きな干鯛屋の隣が藤
兵衛殿の所じやげな、もふ爰らじや
有ふがな、コリヤ筆松よ、どこぞそ
こらに人は居やせんかや。アイ向ふ
の床几におばアさんが、腰をかけて
居やしやる。ム、それは幸、そこへ
いて尋ねて見よ、サアちやつと手を
引いて呉アイく、合點と、床几の
傍、イヤ申、ちと物が尋ねたふござ
ります。仲業の藤兵衛殿とは此傍り
にはござりませぬか。アイ藤兵衛は
こちの内、こなた様は何處からお出
や左様なれば私は天王寺の兵助でござ
ります。と、編笠ぬげば、ヲ、兵
助か、マアく爰へ、よう尋ねてき
てたもつたの、スリヤ母者人でござ
りますか、ヲ、さうじやわいのく

稚い時に見た顔が矢張り有わいの、
ホ、早速内へといひたいが、ちつ
と嫁にも聞かせとむない咄、マア
く爰へかけやくハイく。マア
こなさんも健で影ながら悦んで居ま
した。ヲ、已レも己が身が目を病を
疾から聞て案じたが何の様な。イ
ヤもう散々、身體有たけ目醫者と祈
禱に仕上、とうく今では内障に成
て、仕にせた寺子屋もならず、鍼と
按摩で暮します、夫はマアく氣の
毒、生れも付ぬ盲目と成て、定て苦
勞するである、ほんにわが身と久振
の咄で氣が付なんだ、彼の子は手引
に雇やつたか、イエくこりやわし
が子、ヤア己が身の子か、そんなり
然ふと云やらいで、サアちやつと爰
へと引寄て、ム、兵助に生寫、而し

て健な男の子、名は何と云ふ、ア
イ筆松。ヲ、サツテモよい名じや、
コレ已レは己が身が實のばうじやぞ
よ、兵助と常の親子の様に往來をす
るなら、おれが育てやらう物、可愛
孫と一所に得暮さぬもおれが業、此
子を見るに付て、兵助が小さい時、云
含めて子に遣つたを忘れはせまい。
兄藤兵衛は前の内儀の子、己が身が
出来て繼子を袖にすると云はれては
死んだ人へ立ず、又世間の口に戸を
立てられずと、養子にやつた其日から
今日の今迄顔も見ず、寄付ぬはおれ
が義理を立ふ斗、夫で兄藤兵衛も弟
が有と聞た斗で、互に顔も見ず知ら
ず、二十四年振で我子の顔、おりや
篤りと見るけれど、己が身は生の親
の顔見る事ならぬ、因果な目病いよ

薄い親子の縁、悲しからうと手を取て、歎けば俱に兵助も、顔は見ね共母の膝、撫さすり涙を流し已レが養子にいた時は、まだ頑定なかつたけれど母者人の云はしやつた事、微塵も忘す、門口迄も来ぬ兵助来いと有こなたの肚心得なく、坊主に手を引れて来ました。逢たいとは何の用、譯を聞かねば落着かぬと心を急げば、ヲ、永々問答信せぬ恨みもせず、よう来てたもつた、己が身を呼にやつた譯は、藤兵衛の前の御主人、林三太夫様の娘御お品様、夫の爲に公界の勤、主人の娘御勤さしては立ぬというて、先の親方に今日明日の中に立金せうと隙は貰うて来たれ共、肝腎の金が調はず、此五十兩が埒が明ねば、藤兵衛は生て居

ぬ氣、生さぬ仲と思へば、おりや何うも見て居られぬ、呼に遣つたは此譯が咄したさ、見る所が己が身も有餘る暮し共見え、殊に目は不自由なり、頼に頼みにくけれど、親は泣き、コレ兵助どうぞ、金の才覺して生さぬ仲の母の義理を立させてたもコレ手を合せて拜むぞやと、涙と俱に頼むにぞ、ア、勿体ない、養育にはあはぬ共、産の恩は須彌山よりも高ふござるわいの、おれこそ是迄母者人まめなかと音信もせぬ不孝者の、まだ子と思ふて能頼んで下さつた、金子は手前に無けれ共、氣遣さしやんな借て進せう、夫はぢやうか、ヲ、嬉しい、日比から堅い藤兵衛、己が身の金じやと聞たらば、立ぬと云ふて遣やせまい、兄嫁にも知らさ

れぬ金が出来たら密とおれに渡したも。ア、成程、こうつとあすは二十五日四五日の中にはよい便り聞かせましょ、こな様も苦にして煩ふて下さんなや、何のいの、業が充ねば死もせぬ、ぼんも随分息才で居や、ア、何ぞやり度いが、折悪何にも無い、ヲ、それ、親方殿で貰ふて来た手習筆、そなたの名に相應な物やりませふ。アイヤ申、置かしやつて下さりませ。イヤ、其よふなよいのじやないわいの、と渡せば筆松、コレ父様、筆を貰つた、嬉しい、ヲ、よい物を貰つたな、婢に見せたら悦ばふぞよ、母者人もふ去にますヲ、行やるかぼんも去ぬるか、コレアイ道に犬がゐたら脇道通れ、又こいよ、アイ、ヤコレ兵助頼んだ

天王寺村兵助内の段

切 竹本津太夫

鶴澤綱造

人形

女房	お牧	吉田文五郎
倅	筆松	桐竹紋司
兄	眼兵衛	桐竹門造
寺子	屋兵助	吉田榮三
手代	段八	吉田玉幸
若	い者	大ぜい
手	習子	大ぜい

事を。御念には及ばぬ、お氣遣ひなされますな、サア筆松、手を引てくれ、母者人、おさらばでござりますと、母が心の氣休めも、當なき金の才覺を、心一つにとつ追つゝ蹠く姿見る母が、コレのふあぶない、とば付たと抱きかゆる、恩愛の、是ぞ此世の別れとは、知らぬ互の暇乞、涙の種の稚子が、肩を便に親子連、我家をさして。

(床本) 兵助内の段

法性寺の入道前の關白太政大臣和田の原こぎ出てゝ見れば久方の雲井の君のもて遊びされば、町家の小娘の乳吞に百人一首の手習指南、兵助夫婦墨と硯の戀仲に生長なりし筆松は、目の鞘ぬいても年はまだ七つ

ろはにほたへ盛りなの寺朋輩、アレお子様の悪い事清書に墨付けなさつたお師匠様に告げるぞへ、と喧嘩の聲も媚めける師匠のおまき前垂に、障の文字や粧かい物盥の下の取上髪生れた形の器量よし、ソレお師匠様のお歸りじや、申し／＼お子様のなイエ／＼私や何にも悪い事しや致しませぬ。イエたつた今、イ、エ嘘でござります。ヲ、是はしたり又セリ合ひかいな、けふは休みじやけれどお前方は格別に親達の願み、あがゞと精出さんせや、こちの人が去年の大煩ひから目が見へぬのでわしが名代、目の直らぬはしよ事も無いが此間から又痰咳一倍私が心づかい、筆松こちの人はまだ寝てか、目あい

てじゃないかの、ワイ、とつ様の目

がいつ開いた事が有る、ア、コレそんな事云はぬ物、何ぼ目が見へいでも悪い事仕やると父様はよう見てござるぞへ、と云へども子には目のうちも薬の片手針仕事、まをしお師匠様私の帷子も早う仕立てゝおくれなされ、七夕に内方へきて踊らぬは成りませぬ。ワイ、其間には合はすわいな、ア、忙しいとは云ふものゝ道理、目かいの見へぬこちの人不自由な目かきすばいと何ぼ勤めても女子の手一つ、手の廻らぬは勘忍して下さんせへ、申しお師匠様お前は兵助様が何として可愛いへ、ハテ男じやもの可愛いなうてかいな、アノ男はどうして可愛いものじやへエ、根問する子ではあるわいの、それはナア可愛い所があるわいな、其

可愛いは何處じやへ其可愛い所はホ、ヲ、此子はいのう置かんかいな今時の子供はどうもこうもなるものぢや無いわいな、それはなお前もまあ五六年したらつひ合點の行く事じやわいな、そんな事習はずと精出して手習ひさんせこちや夕飯の拵へせうと、米かし桶水仕の役も一人して清水流るゝ柳腰夫は蟬丸是やこの行くも歸るも別れては、申しお師匠様コレハシタリ又お忘れかい、知るも知らぬも逢阪の關、難波に住むと佗びぬれば、短きおあし長月の有明の月と見る迄に、能宣の朝臣みかきもり衛士の焚く火の夜はもえてヲ、湯の下がもえ出ると、木をさしくべる釜の下、色は灰猫盗人眼の眼兵衛、夜明しばくちの負腹を、妹にたゝる

神様様、上り口から來たぞ、夕べアえらうくさつたものじや、何奴も此奴も忌々しいぞ、けたいが惡いぞ、ヲ、氣違ひかと思ふたら兄様かいな、暑いのによう御座んしたな、何じやよう來たコリヤヤイ、六だいに四引いて跡へ三つがうせくさるわい、それが何處によう來たエイヤモウ此間のまんの惡さちよぼの胴取りや側へ取られる、くさり續けじやによつてけたいが惡いと云ふがおれが無理かい、誤りかい、サアそんな無理じやあるまいけんどもそれを私が知つた事かない、ヲ、知つた事じや、一體われがあんなどう盲を男に持ちやがつたによつて根つからさいの目がつかず、日の目見ぬわい、其上にアノ貧乏めくらを養

ふとて小遣ひが切れたのイヤ藥代じやの、と此兄に無心ぬかして、粒三文屢さぬじやないかい、ア、コレこちの人が寝てゐやしやる然んな事聞かしとむない、聲低に云うていなアイヤノ聲高に云うのじやわい一体アアアノ男持ちをつたもわれが惡性からじやわい、サア何故と云へ現在おれといふ兄様をさし置いて他人と念頃しくさつたがけたいじやわい、そして、アアあきもぬ、寺屋仕上るよりばくちの寺屋でも仕をればよいに、ヤイがきめら何ぼでばくち仕上るぞご、やくにも立たぬ手習ひする手間でモウそろくとり掛か花合せでも稽古仕上にサア妹あんな貧乏神に添はして置く事はならぬは、ばくちの形につれて行く、伴れて行

つて何うさんす。ハテ知れた事じや嫁入さすわい、夕ばくち場で出會うた大松屋の手代段八といふ人聞いた所が親方の銀を大分しこためて假取つたとあるからは、ヤどうでも發明な人さうな、そこへわれを嫁いらすのじやわい、エ、何じやいな、云ふ事と云はぬ事と、耳かけがれるエ、いやじやくくくわいなア、サア、それが嫌なら金おこせ、おこさにやおれが行摺つてゆくぞ、エ、モ嫌じやわいなア、エ、うせいと詞もあら寺子は逃る兵助も、聞くせつなさの思ひ付、かたへの基盤引寄せて碁石つかんで財布に入れ金と見せた目くらまし、障子ぐわいりとそ知らぬ顔、ヲ、眼兵衛殿お出でか其元に會ひたかつた別の事でも無いが、

私も此中久しく掛けて開いた頼母子が落ちて一貫目許りはいつたじやてそこで其元は兼て慰みが好きと聞いた故少々盆種に進ぜうと存じ、コレ斯うして退けて置いたが、入用になくば何うなりともと財布を出せば恠りしてあざ見たやうなにく顔エ、は、是はマア御深切なと申さうか、一家なればこそ其金をヤモどうでも親は泣寄りじやなア、そんなら貰ひまして歸りましよかいなア、が中を一寸あらためて、ソ、ソレ御覽じ私が様な貧乏人の持つて居る金じやによつて心許なう思はつしやるならマアこつちへ取つて置きましよ、ア、申し何のあなた銀を改めるに及びませうか、めつばうかいなア、アハ、モウお暇

申しまする妹一寸來いコレ妹わりや
まア結構な聲様じや随分と大切にし
やヲ、筆松ヤナニ筆やんかいなく
ヲ、いつ見てもく良いお子様じや
手なら顔なら親御にこの似やう、是
に目がつぶれたらイヤモとんと其儘
生寫しじやム、ドツコイしまうて
けつかるハ、イヤモおれも銀に
は目が見えぬと盲に取られて眼兵衛
が何でも今日はゑゝ胴でヤ七八十貫
いかしてこう、してこい合點と一人
言夢中になりて歸りける、ほんにマ
アあんな憎へらしい兄様を親達も産
まぬがよいわいアナア、嘸腹が立つ
たでござんしよ癢押へにドレお藥、
ほんに私といふ女房の縁で様々の事
聞かしやんす。堪へてやいの、の、
ハ、ハ、ハ、アレわけも無い人腹も

立たず氣合もよい、そんなにマア一寸
くつしやみする藥を吞めと、ア仰山
に醫者殿コレ氣づかひしやんなおり
やモウどつこも悪い事は無いぞや、
ソレ其様にわしに苦をかけまいと何
ぼいゝといはしやんしても顔の色が
正銘、毎朝痰に血の交るは痰血とい
ふて氣から起つた重い事じやと立庵
様の見立、お前も又其様に何か藥に
成るぞいな、わしやちつと氣にかゝ
るはア、何時やら日頃音信不通の母
御様から頼みたい事があると文でお
前を呼びに來て、それがらどうやら
濟まぬ顔、もしやマア何の事でござ
んしたへ、若しも病ひに成るやうな
事じや無いかへ、モウ何んな事であ
らうも私に遠慮さしやんす事はござ
んせぬサアつひ聞かして、ハ、ハ、ハ、

ア、物案じする人ではあるわいの、
そんなナニヲいそれくマア悦んで
たも、おれが腹がはりの兄貴が此頃
相場で手が合つて一飛に出世しられ
何が家を買ふ普請をするソコデ母者
人は御隠居様、コレマア聞きや何と
親といふものは結構なものじやない
かいの、おれ獨り樂しやうやうは無
い兵助も目の見えぬのに寺屋もおき
や、按摩もやめい、女夫ながら引取
つて樂々に養ふてやるとそれでアノ
おれを呼びに來たのじやわいの、追
付乗物に乗つて按摩とりしたらム、
面白さうな事じやぞやと、口から出
次第間に合ひと思へど押して間はれ
もせず、ム、そんな事でござんした
かいなヲほんに其時ばゞ様に貰ふて
來た大文字筆で松竹梅、それはく

此頃は手が上つて此マアよく出来た
をお前に見せたいわいな、エ、何が
筆松が竹松海を書いたのがよう出来
たか、アイ、ア、見たいな、コレと
つ様お前の目はいつ直るや、角で友
達と遊ぶと盲の子せがれじやと云ひ
おつて遊んでくれぬわいのふ、おり
や口惜しい、ヲ、だんない、そんな
奴と遊ぶ事はない内で遊べシタガ
目の見えぬ親を持つたゆえわれ迄が
あなどられるか可愛や、ナハ、
、ア、色々のぐちな事を、ヲ、ほ
んにおりや一寸往てこにや成らぬ所
がある、コリヤ筆松きてくれ、おま
き付いてこうと立上り、肩のいた撰
糸の羽織もようかん色、ア、コレそ
んな形でめつそらな是着かへて行か
しやんせ、ハ、ン是とはコリヤ手觸

いが新らしい様なの、ヲ、しかもよ
い晒じや思ひ切つて買やつたの、
イヤモチト地がもつとそ、うでお前
の氣には入るまいけれど盆帷子にや
う、夕べ縫上げたわいな、ア、ソ
リヤ忝ない、そなたは何から何迄、
戴きます、そんならわが身手傳ふ
て着せてたも、之では又ヤア旦那衆
じやわい、ヤ何せう、今日は筆松に
留守さしておまきやわが身と久振で
道行して行かうわいの。オ、それもよ
ござんしよ、サア手を引いてあげま
せうや、待ちやい、我身の着物は
いかうつぎが當つてあるぞや、おれ
が斯いふ立派な装りでは取合ひがわ
る、い、つそわがみも一枚着代へて行
きや、さうしや、かうツと其方に
よう似合ふかたばらはオ、それこの

藍桔梗にしや、あれに黒縹子の帶さ
すとまたよい女房ぢや、サとつてお
ぢや、い、えその……はナ、ど
うぞしやつたか、い、え、オ、それ
、裾がふくろびて縫ひかけてござ
んすわいな、ウム、さうか、そん
ならあれをのけてウ、オ、アル、
あの絹縮みにしやう、あれにしや
、サアとつておぢやれい、えその
絹縮みがなア、それもないか、アイ
オ、何のあるぞい、この春の薬
代にわがみの着物装束隣りの婆さま
に頼んでやりやつたのウ、目こそ見
えね、おりやよう知つてゐるわいの
幾つになつても女子の樂みは髪かさ
り着類衣裳ホンにまア、寝衣一つな
い様に我着物は賣代なし、おれや筆
松には見苦しい装りもさせまいと、

兄にまで無心いひまはつて、夜もろくに寝ず賃仕事、其方のやうな貞節な人がなんとして己れがやうな不甲斐ない男を持ちやつたと、おりや其が不憐など涙ぐめば、えゝ何のまあ男の爲にする苦勞、わし衛なうも何ともないに、えゝもうツツとそんな事、氣にしやさんす故それでお前その目が治らぬわいなあ、なんぼ貧苦に暮してゐても親子三人一緒に居りや、これほど目出度いことは御座んせんぢやないかいな、オ、ほんにさうぢやのうほんに先刻にから泣いてばつかりゐて縁起がわるい、門へ出掛けにワツサリ一つ笑ふて行う、わがみも笑や、アイ、おれも笑ふ、おれも目出度いゝと笑顔の中にハラゝと降るは日和の雨なれやへ直

ぐな大道、横縞帷子、大松屋の失策手代、段八デスとゾツと入り、オ、これはゝたゞ今お前へ参らうと存じたところ、ようこそゝ、いやなに、おまきあなたは、此間そとで始めてお近付な、モ、それはゝ御怒ろに、サ、まあゝこれへゝ、あいや構はつしやんなゝ、寺屋の内といふものは奥へ行くほど廣汚いテナものぢやてな、いやなにお内儀わしは近い頃、あちら町へ假座敷かうて来てよい妾があらば置きたいと吟味最中、時にこなさん、先度から見てゐるが、さてよい器量、目も見えぬ人にアツタ女房もたして置くことぢやのう兵助どの、ハ、ハ、ハ、氣の軽いお人、いやもうわしも餘り用がなさに慰みに寺子をとります。

ヤ、これ女房ども、奥座敷さうぢししておぢやいのえゝ折悪う今日に限つて女子共や男共は何處へ行た、となおもせぬ人せい八百、アイゝゝと腰元役奥様役も一人してアタフタ立つて行く後に兵助は納戸より掛物箱取出し、これが此間お噂申した一休和尚の墨跡、即ち古筆、了恩の極め紛れない正筆、親共からゆづり受けて大切な品なれども、様子あつて今日中に金子五十兩なければどうも生きてゐられぬ仕儀、必ず女房どもに御沙汰なし、お求めなされて下さるなら、トテモの事に金子を只今近頃性急な事ながら是非今日とて、手を下げて頼む言葉もヒンゝ聲、ウム一休の正筆に極まれば五十兩には高くないもの、成程買ひましよ金も

茲に持つてゐるぢやてや、それは幸ひ、あゝいや幸ひでも今はならぬで何ほ極めがあつても、目柵にもかけず減多に金は、いやも、それがちがうたら私をどうなりとも、人間一人助けると思召して、これ申し〜と手を下げる後に二三人、コリヤ見付けたと掛物をひつたくつて、ヤイ兵助わりや、マアうまい事するな、此方の旦那の秘藏の掛物、たつた一日お借しなされと借りて去んで、戻さぬこそ道理、賣つて金をせしめうとは、盗人の骨頂め、家主へいつて仕様がある、サア失せう〜と引立つる、マア〜待つて下され〜尤もぢや〜、成程盗人に異ひはないけれど、それを云つて貰うては私は此處に身がサアならぬ様にするのぢや

わい、サアうせい〜と無二無三、宙に引揚げ走り行く、物騒しは何事と何心なく出る女房、ヤアこちの人をと馳出す、段八が引抱えマア〜待たんせ〜譯を話して聞かす程にいえ〜譯を聞く間にマア彼方へ、サイノウこなたが彼方へ行くと兵助の爲にならぬ程にがそれとも男に首なはかけたのかえ、さあぢやによつてまア下にゐやんせいのう、あの兵助を大ぜいしてつれてゐた譯は此方の男はぬす人ぢや、さいなあ、しかもそのぬすみ物をすんでの事に俺までを質はずにしやうと、おう怖やの々々怖やの、なんとまアきもがつぶれるかいの、はア、つねから落ちた物さえ拾はぬ正道な人、そんな心の出ると云ふは、わしが推りよ

うにたがはぬ母御の文もうよく〜の事なりやこそ、ぬす人かたりと恥じしめられ、エえ、さぞ口惜しからああこれ〜、これ又きよう〜と何所へ行くのぢや、ぞいのぢやと云ふてこれがまアさいのう男のなんぎが救いたくば極く上々の思案があるは、エ、マアそれはどう云ふ思案ちやつと聞かしてはて氣ずかいせまいて高が金故の事ぢやないかいの、その金俺が出してやるわ、ええ、そりやあのお前さま、眞實でござんすかおいの實に如何なる神か佛さま、有難いか〜、ハハハ……が、此所が相談、その代りに此方を俺が女房にするが合點か、ええ何んの事ぢやいな、氣のもめてゐる最中に、あほうらしいと腹立ちがほ、ハテ嫌なれば

此方こつちもいやぢや、何もそのやうに腹はら立てる事ことはないぢやないか、金かねは此方こなたの物代物ものしろものはお前の物ものとなりやもとの出入り、世界せかいに其方そなた一人が女ぢやあるまいし、金かねさえあれば、どんな色事いろことでも出来る時節じせちぢや、が、此方こなたそれ程ほどまでに兵助へいすけが可愛かあいいいかさあ、なんのそうではなけれども目の見えぬので人様ひとさまに何なにかにつけてあなどられさんすが、妾めかけはいとしわいな、ハハハ……それが矢張り可かあいのぢやが、あんな貧乏びんぱ神思おもひきつて、せんだうから貴さまの兄あにの塙兵衛がんべゑにも云いひこんである段八だんぱち俺おれが女房にようばうになりさえすりや、五十兩ごじうりやうやそこらの目くされ金かね、此の紙入れかみいれにも此の通りどおり。エ、それはオツトどつこい、さまア、それから御覽ごらん

じピカリと光るぢやてなア、ハハ……俺おれになびけば此金このかねやつて兵助へいすけが生命いのちの難儀なんぎも逃れるぢやてまたほしがらぬ金かねを無理にやられもせず、ああ可かあいや兵助へいすけは盗人なすびになつて、今時分いまじぶんは寄つてたかつて髪かみの毛けを引きぬいたり、ふんだりけたり打ちのめされてあるであろと夫の身の上うへ聞く度々たび、癢かゆにあたりし氣づかいさ金の欲ほしさとつらにくさ、だましてとらんと笑顔えがほして、オオほんに女子こと云ふものは、有りやうはなぶらんすのかと疑うたがふてゐたが、今のでとんと合點がってんがゐた、ア、いかにまあんな男おとこに添そふてゐては、末がつまらぬわしの方がからひまとつて、お前の女房にようばうにならう程ほどにさア其金そのかねを下さんせうむ、合點がってんがいたか、然しから

ば此金このかねは結納ゆめなまのしるし、さらば渡わたそうと云ひたいがまア嫌いやぢや、金かねはそつちえとつて了しまひ、どろ龜拔かめあひけに合あはそういやもうそうは立ち合あはぬてハハハ……兵助へいすけと縁えんきと云ふ確たしかかな證見しょうけんにや渡さぬ、ええも疑うたがひ深い何んと證據しやうこは見せるわ、いや他の證據しやうこはいらぬ、兵助へいすけに去り狀さきじやうとつて見せや、ええさそれも今此所で、俺おれが目の前まへで書かかして直すぐに、わが身は連つれてゐぬ、又またそれが嫌いやなら金渡かねわたさぬばかりぢやない、此の段八だんぱちも戀こひの戀地こひぢ、兵助へいすけはぬす人でござりますと、代官所だいかんじよへ訴うたへるぜ、さア、それは女房にようばうになるか、さア、男おとこを殺ころすか、さア、さアとがのれぬ手づめ、おまきはハツト云ふより他ほか、泪なみだも千々になりけるが、思案しあんを極め、段八だんぱちさま

去り狀とつて見せませう、おうこれでサラリと氣がすんだ、それまで俺も此所うごかぬ、目くらめが戻るまで商してゐやう、段八奴が落つき顔の煙草ぼん、無慘やな兵助は心がらとて多ぜいの、荒くれ男にさいなまれ、羽織かたびら引きさかれ我家の内もそこ此所と、探りつきたる目なし鳥、つばさはなれし如くにて、あ天命は恐ろしいものぢやな、親の爲とは云ひながら、恐ろしい企みて何んの思ふやうにいかうぞい代物はとりかえされ、未だその上に目かいの見えぬ者を踏みちようぢやく、口惜しいとは思はねど、命さいかくの手は切れる、此體見たら女房子が、さぞ悲しからう可哀やと、泣けば中にもたえかねて、わつと泣き聲、女

房が、エ、面目ないわい、これ此のなりを見てたもと、おうばい、立ちよれば、兵助殿、ひま下んせ、やゝ何、なんと云やる、思ひがけもない、そりやまアどう云ふ譯で、あい、あいそがつきたわいな盗みかたりする男に連れ添ふてゐてどんななんぎに逢はうも知れぬ。此さんと縁きつて他の男を持ちかへてわしやゝ結構な身になるわいな、さ、早ふ、書いて貰はふと云ふて泪をぬぐふとは、知らぬめししいの一すぢのエ、聞こえぬぞよ女房ども日頃の氣を知りながら、盗みすると何んの身慾にしようぞいやいうむ聞こへた、よい身になると云ふからは他男にを拵へて置いたな、エ、見ちがへた、ちく生奴、ああと云ふもの

の無理ではない貧苦の上に目はつぶれる、取る所がない俺が體、愛憎のつきたも尤もぢや、オ、思切つておりや去つた、ア、その心とは知らないで、可愛いや俺ゆえに苦勞をすること、その上に五十兩といふ金の要ること聞かしたら氣をもんで煩ひ居るかと、いたわつたがゝゝ、えゝ、口惜しいわいと、身内をかんで腹立ち泣き聞く女房は身も世もあられずそれ程勿體ない、言ひたさを言葉の裏わしや、此方さんの事なんとも思やせぬに依つて、わしが事もまた何うならうかまやしやんすないな、もゝ何のかまうぞい、何方なりと出て行きをれ、オ、出て行くと氣強う見せる胸の内、はりさくばかりのせぐるしさ傍に段八叱り顔、イカナニ兵

助殿、心の腐つた女房、早う去狀かいてやらしやれいの、ア成程といふてわしは目が見えず、こりや筆松硯もてこい、筆よゝゝ、アイと答へて紙硯、父さま狀ならわしが書くぞえおゝわれは父が子ぢやに依つて、おれがいふこと味よう書けよ、アイ何でも書く程に、後でけし人形かうていと、何の頑是も七ツ子の親子の別れと白紙にそこへ一點うつて、其方どのと書け、えゝか、ア、暇つかはし候事、實證也、筆松よ、わりアノや暇といふ字を知つてゐるか、アイ昨日母様に教へてもらふてよう知つてゐるわいなと、書くを見てゐる母親が、夜にはほめし幼子の覺えのよいも恨みしく、夫に愛憎つかさゝ離別の狀を書かそとて、誰が手

習ひをさすものか、くやむ女房の眞實は、知らぬ兵助ハラゝ涙、見下げ果てた畜生め、サ、暇つかはし候事、實證也、何方へ縁付いたされ候とも申分は御座なく候、愛へ母が名を書き、また此邊らへ父の名を書け、アイこれでよいかえ、オわりやア親の代りする孝行な子ぢやな、ケな者ぢや、賢い者ぢやゝゝ、まあこんな花の様な子をしてゝ可愛いとも思はず出て失せる、己れは何たる貪欲者、犬猫でさへ子は可愛がる、四ツ足に劣つた女めと、去狀ハタと打ちつけて男泣きに泣きければ、ウムよう書いてやらんした、サアおまき女郎、これさへあればもう誰が點の打つ人はない、チャツとおぢや、ア、アイゝゝな、コレゝゝ、筆松

父様の癪が起つてたらの、針箱に九子があるぞえ、短氣なことしやさんせぬか、刃物をかくして置いてたもれ、言ふ間もせわしき段八は引立てられて出でゝ行く、コレノウ母様、ゝと慕ふ我子の可愛さに母の憎さも百層倍、剛巧さうに子を棄てる根性で己れが、病氣が何で苦になるだい、今日中に金が出來ねば所詮生きて居られぬ己が身體、いつそ面當死んでのけうと、探り取出す脇差を、抜きかくる手にとりついてワツと泣く子に氣も弱り、オ、可愛いやゝゝな、あ、おれが死んだらわりや餓え死にするである、堪えてくれと抱きしめ、何の因果にあれば様な片輪を親にもたそと、撞と伏してぞ泣きたるやゝ、時移る西日蔭、汗た

増井の段

竹本大隅太夫
竹澤團六

人形

寺子屋兵助	吉田榮三
悴筆松	桐竹紋司
朝日奈藤兵衛	吉田玉藏
手代段八	吉田玉幸
女房お牧	吉田文五郎
兄眼兵衛	桐竹門造

つらく／＼せきくる眼兵衛、戸を踏明けて入るや否、兵助が胸ぐらグツと引付け、アイ兵助、ようもこんな銅脈くらはしたな、何でもありたけ張つてさらへてこまそと、あけた財布のこの碁石、博賭場の付合はねられたわい、其代りに、罰が當つて妹にも突抜され、オーよい態／＼、いっそ乞食しやがれと、財布うちつけ、せめてこのそふらいしなとたくつてこませともぎとり、序ひに踏みこかし、悪口たら／＼立返る、エ、兄妹そろうた悪人めと、無念の拳おもはず知らず引きちぎる、財布はとけてバラ／＼、これ父様小判が出たわいな、ヤアなに小判、ハ、ハ、ハ、子供といふものは何をいふやら、ワツケもない、何の小判が出やうぞい

それでも小判ぢやもの、ド、レ何處に、オ、ほんに小判ぢや筆松、表しめて来い、エ、ほんに小判ぢや、／＼、オ、五兩十兩二十兩、三十兩四十兩、四十五兩、六兩、七兩、八兩、九兩、ア、コレ父様、こゝにも一つ落ちてあるわいなあ、オ、これで丁度五十兩、夢ではないか、神佛の加護か利生か、さてはあの意地悪と見せかけた眼兵衛殿と女房おまきが言合せアノ大松屋の手代段八を抱込んで欺してとつた五十兩の金か、エ、それとは知らず悪人呼ばり、許してくれ／＼、何にもせよ今日中に日限りの金、一時も早う兄貴の方へ、筆松来い、ア、これ父さん其處は溝ぢや、もつとどつこいしよと嬉しさに、西か東か方角もこけつま

るびつ走り行く、

(床本) 増井の段

斯とは知らず兵助は篠を亂せる吹降に、只さへ見へぬ盲目の子に東西を教へられ、走るも夢の心地して、氣をせく耐足とまぐれ、はつと息せき石の角かつばと轉び、苦しめば、と、様怪我さしやつたかと、拵起され一片息に、イヤイヤ怪我はせぬど折悪い瘡がさし込んで、アイタ、あゝどうぞ今日の間に合はさふと天王寺から無中に走つたが、モウどこちや、アイ爰は清水の増井、ム、是から靱へまあ二十町程、雨もやんだ、ま一息走らうと、立んとしてはアイタ、草に取付き這廻れば、とゝ様なんとしましょぞと、子と

ろくと泥水をすくへど、かひも泣ばかり、去進は又此瘡が起らずば、何のそのこれ式の事拵て行れぬといふ事は、アイタ、ア、是では一足も行れぬ、ア、こんな氣が付いたら瘡挫丸を持て來たらよかつたにと、様丸子が鉛箱にある。往んで取つて來ませふ、イヤゝわれが迷子になつたら悪いよしにせい、イヤ道はよく覺へてゐる、ちつとの間につい取つてくる程に、どつこへも行ずに待つて居て下されやと、云ひすてかけだすいたいけ足、ア、こりやモウよししてくれいやい、筆松にはもう往たか、怪我してくれなよア、可愛や親子なれやこそ、六つや七つの子心にも、親を大事に思ふて、此雨降にはだして、足もたまる物か、よい

衆の子なら孝行者、利口者と撫でさすつても育る物、子を持ば罪ではあるぞ、アイタ、ア、とに角にも世の中の貧は病の司だと、悔みにいとさしのぼる朝比奈の藤兵衛は、今日一日に追つたる、金の才覺屋計、安居の宮へと行先も、途方にくれ方うとゝと、思はずばつたり行當りオ、これはしたり、赦さんせゝ、そして目の見えぬ人そうな、目明が盲目に行當るとは、面目次第もヤコリヤきつい病人じやわい、瘡起つたそうな、幸茲に紙入の人を助ける粉薬も毒となるとは白露の草をしぼりてうるほせば、ア、どなたかは忝ないと愧ぶ姿に氣も落つき、いとしや難儀でござんせう、ちつと心ようごんすかと、さする手先にさはつた財

布、紐の端くれ因身の端、引出す手をこりや、何んじや、何するのじやともぎ放し、ヤレ、死しや、すでの事で、高い藥を呑ふとしたとつぶやき、立つて行、コレ、御病人待つて下んせ、どなはんじやしらぬけれど、男と見かけて頼みたい事がある、頼まれて下んせといふて外の事じやない、その首にかけて居さんす金をわしに、貸して下んせ、お、肝つづける筈、此間から近付といふ近付、足でかいさまにかけ廻つても出ぬ金、一目も知らぬ人に、貸て下されとは此様な無理が有らうかけれどもけふ中に五十兩と云ふ金が必要ればどうも人中へ薙が出されず腹切つて死にやならぬ、おれが命は惜ふはなけれど、まだ外に大切なお

人、今ちよつと持つて見た、丁ど四五十兩、利金を貸して下さると、三人四人の命が助かる、情ぢや慈悲ぢや、これ頼みます、ほんに是迄こんな非道な事云ふた事のない男、盗人共後とも人非人のやうに思はしやる、面目ないわいの口惜しいわいの、頼む、成程、そふ云はしやりや非道とは思はぬ、定めてそちにもせつない道理が有ての事であらうが、こつちにも夫は、大ていや大方せつない金ではないわいの、其様子と云ふは、小さい時別れた母者がせんどわざ、呼におこされて、呉々の願、金の入わけはわしが、腹がはりの兄貴大方こな様方も知つて居やしやる朝比奈の藤兵衛と云ふて、巻立に髪結

ふて人に顔を知られたこと、その男のしたること、つひにあふた事はなけれど義理のある兄貴の命つく、身を粉にくだいて漸くともへのへた金何とこなた進せられうが、今日中にもつて行かねば、兄藤兵衛の命がない、今生の情ぢや、どうぞ了見して下され、これ拜みます、と手を合せ、かきくどくを其身の上とに開けられぬ薙の悲しさ、くりかへし拜ましやるはならぬといふ事ぢやの、これほど云ふにそりや聞分けない、アレモウ日が暮れた。今夜がすぎると絶望絶命、聞分けがなけりや一刀にといふてこれがどう斬れうぞ、一生の悪日が廻つて來たと思ふて貸して下され御病人、見えはせまいがわしもこれ手を合せて拜みます。ア、コ

レ、近付でもない人に拜まれる
覚えはない、何ほどのやうにいはし
やつても、この金は藤兵衛殿より外
の人にやる事はなりませぬと逃げん
とするをそりや朋欲、どうぞお慈悲
に貸して下され、どうぞお慈悲に見
逃して、お慈悲と両方から、頼
むは兄とも弟とも、知らぬ佛の氣を
鬼に引きつかむ金財布、やらじと
引けばちぎるゝ紐、小判みだれてバ
ラ／＼、彼方が、拾へば此方が
さゝえ、盲も目明も暗がりまぎれ、
藤兵衛が脇差のこじりをとつて引戻
す、拍子にヒラリと鞘走る、アハヤ
と刃物取上る、その手にしつかりし
がみつ、コリヤおれを殺しやるゝ
か、殺さば殺せとねぢ合ふ非力、あ
ぶない退いたともぎはなす、はづみ

に脇差一刀、南無三寶手がまわつた
か、勘忍して下されと、謝びるも肯
かず、エ、無念な、己れに金を、渡
さうかと、兄弟たちまち修羅道の、
因果の廻り、是非がない、御主の爲
ぢや盲目どの、許してたべとまたズ
ツバリ、斬られて土手へコロ／＼
／＼血はつたふて草の上、折しもし
きりに降る雨は、天の悲しみ血の涙
月日の眼にバラ／＼、いとど水
量増井の井戸、水と消行く盲目の、
闇より闇をコロ／＼、筆松ヤイ
／＼、この金を藤兵衛殿に渡した
エ、死にともないと言死にはかな
りける最期なり、南無阿彌陀佛と
どめの刀、箆據にあらゐ刃の鉦、金
はあたり散亂して、尋ねる胸も暗
闇に、見廻す頭巾の高燈籠、灯かげ

を力にすかし見て、兵助殺まるお
こうヤアコリヤ母者人の手跡、腹變
りの弟を、兵助といふと聞いたが、
そんなら今殺したが弟であつたか、
ハアハツとせききり取上し、我と我
が腕かきむしり、みつむる眼にバラ
／＼砂を飛ばす涙あり、斯る所
へ段八が己が心の暗まぎれ、兵助が
行衛をばそこかこゝかと、蚤取眼、
スタ／＼歩み來かゝりて、エ、怪體
な盲めにかゝつてホツカリと草臥れ
た、どつちへ失せたやう、エ、何ぢ
やズル／＼と氣味のわるいと、足許
ウソ／＼、そりやそこに、わりや段
八か、ヤア藤兵衛か、たゝんで了へ
と斬付ける、さうはならぬと斬結ぶ
折から大風サラサラ、段八やう／＼
心付き、オーえらい音だ、たしかに

頭がわれたと思ふたが、嬉しやひど
きも行つてない、いや待てよ、今の
響で、喧嘩をとんと忘れた、藤兵衛
は何處へ行きをつた、ア、うまいぞ
、此處に目をまはしてあの態、
ヤ、、此處に兵助が殺してある、
ヤアそんなら藤兵衛めが殺して、金
とりをつたに極まつた、そりやこそ
首にかけてある、エ、天道は正直な
雷に魂をうばはれた奴、どうせ
うとまゝ、なぶり殺しにころして、
兵助を斬つた盗賊の藤兵衛と注進す
れば後腹病まず、さて此金を着なう
還御なしたてまつらうと、いたゞく
財布をひつたり、むつくと起きる
朝比奈藤兵衛、直ぐにドツサリ、引
かつぎ投げつけられて、夢みた心地
アイタ、、どつんぼめ、こりや

どうしよう、どうもせぬ所詮われ等
生けては置かれぬ。今ぬかすを開け
ば、藤兵衛が兵助を殺したと注進せ
しとほざいたな、ヤアわりやそれ聞
いたか、オウ聞いた、イヤーそんな
らわりや耳が聞えるか、こりやどう
ぢや、とビツクリすれば、其身もビ
ツクリ、ほんにおりや耳が聞える、
ハテ不思議な、ウムさては雷のひ
きに、年來の病の根を打破つたか、
これひとへに、日頃念じ奉る、天神
の御利生ア、恭い、サア天道
の力をそへる朝比奈藤兵衛、覺悟せ
いと立つたりけり、破れかぶれと段
八が、だんびらヒラリと斬付ける、
心得まつかせ丁と受け、弟を斬つた
も己れ故、思ひ知れやと斬込む深田
心地よかりし時も時、胸もどきく

眼兵衛おまき、道で合ふたる筆松が
手をひく親の小提灯、行き當つたる
夫の死骸、ビツクリ當惑、藤兵衛が
丁と受つたる割簀、提灯バツタリ
眞の闇、跡をくらし立去りぬ。

☆ 空 大 れ 護 ☆

習 演 空 防

日 二 月 九
日 十 一

部 令 司 團 師 四 第

扇子や道草

はな

須磨都源平躑躅

扇屋内の段

扇屋内の段より
五條橋の段まで

人形

中 豊竹 竹 野 鶴 鶴 切
次 竹 本 澤 竹 澤 豊
豊 竹 相 友 古 竹 鶴
竹 八 生 鞆 古 澤 豊
太 太 太 太 太 鶴
夫 夫 夫 夫 夫 澤

熊谷次郎直實 小實 實 阿 扇 若 娘 扇 青
次郎 無官太夫 根 狭 折 折 山
直實 教盛 平 女 桂 折 軍
次 盛 次 狭 子 り ち 次
吉田 桐竹紋十郎 吉田 桐竹紋十郎 吉田 桐竹紋十郎
三 郎 三 郎 三 郎 三 郎 三 郎
徳助 郎 郎 郎 郎 郎 郎

この作者は文耕堂、長谷川千四で内
容は平家は都を落ちて一の谷にたて
籠り、世は源氏の世となつた。殿上
人右大辨重虎は、妹品照姫と平家の
公達無官太夫敦盛卿との婚約を反古
にして今を時めく源氏のきれもの阿
根輪平次光景の妻に與へやうとする
その上敦盛が結納の印につかはした
秘蔵の青葉の笛を返さない。品照姫
は阿根輪の心に容易に従はぬ。され
ば阿根輪には懣敵と軍敵の平家の
落人敦盛卿、その詮義に餘念なかつ
たが何處に忍ぶか行方が知れぬ。所
がある日、五條の扇屋若狭大塚「上

總」といふものが重虎の邸へ青葉の
笛を借りに來たので何心なく貸し與
へたが、ふと敦盛の在家が感づかれ
た。阿根輪は勇んで扇屋に詮義に向
ふ。舊臣なる扇屋若狭方に大勢の折
子に交つて女妾にやつして身を忍ば
せた敦盛は久し振に青葉笛を吹く。
熊谷次郎直實は一の谷合戦の軍扇を
あつらへに來てこの笛の音に耳を傾
けた。阿根輪の詮義は折子女を一人
一人の乳房まで厳しく改める。敦盛
は所詮免れる道がなかつたが任侠な
熊谷の計らひで若狭の姫桂子の首を
身代りにして阿根輪の眼を偽つて歸
す。熊谷と敦盛は互ひに出陣の武者
振勇ましく五條橋で出會ふ。熊谷は
敦盛の軍扇を與へて、戦場で再會を
約する。敦盛は一度助けられた命を

その時潔く捨てると誓ふ。この段は特に病氣全快の古靱太夫の獨得の語り物で五十年振りの出し物である

(床本) 扇屋の段(口)

日の本に又類ひなき都の地、五條通りの其中に軒に暖簾の風そよぐ扇屋若狭の大様と店に扇の手仕業は冷風價へ千金の風を商ふ身柄速日々に繁昌末廣ふ家名を世上に唱しけり仕業片手に主の妻皆の衆今仕立て居る仕業は堂上方御歴々様よりのじや程に随分共念を入塵抹のない様頼むぞやと云はおむつが取あへず、ハイ、そりや此間から旦那様より附ておりますれば精一ばい氣を付ておりまするが申此頃旦那様のなされてござるアノ陣扇といふ物はいかうむつかし

い物でござりますノウおり、サイのふわしも此間から見てゐるに中々お骨の折る仕業ア、産相云ふた扇屋に骨の折るとはコリヤ差合で有たはいのホ、余程お骨の入る仕業でござりませふな、さればいのは是は註文でもなし又賣物でもなけれど若狭殿が物好で仕らるゝにも是にはちつと譯の有事イヤ申お家様いつぞやから旦那様の連立てお歸りなされたアノ小萩殿さてもよい器量御寮人様とならべて置たらホンニ見あきはムりませぬ、したが申折々々旦那様が小萩様の關へいて合點の行ぬ長咄しあれではてつきり旦那様と何でも譯の有様子何ぼお年がめしてござる逆油斷のならぬは男のくせだまつて計ござらず共ちとおつしやつたがよい

はいなと差合構はぬはつさい者法界格氣と見へにけり、妻のおりんは片頬に笑み、テモマイつ逆も氣がるな人此りんもそなた衆の時分には花咲せし事も有たが夫れはとんと昔の事假令旦那殿がどの様な事が有ふ共年寄てそこら所かア又譯を知らぬわがみ達故定めておかしう思やらふが、アノ小萩と云のは連合の子なれ共今迄音信不通様子有て連て戻られこちの内に養ふからは私が娘も同じ事コレ如才はなけれど二人共氣を付てやつても、と物知らかに後先をしづめゆるめつ扇屋の詞に人をあふぐらん二人下女は聲揃へハイ、夫で譯が知れました左様の事と存じましたらもそつと大事に致しませふに知ぬ事逆不調法おゆるしなされて下さりま

せ、したがもうお晝時に仕ませぶ今朝から余程精が出た定めておらかもすいたで有ふそなた衆は先へいてゆるりつとたてておじやハイ、左様成ばお家様お先へ御免とそこへに二人は勝手へ立て行。

(床本) 扇屋内の段(中)

楔押明主の若狭小萩を連て立出ラ、そなたは一人店の番かエ、又何も角も此様に取ちらして置おつたとつぶやきながら納戸口後先見廻し小萩を上座に夫婦の者敬ひ参らせ手をつかへヲ、おいとしやな高位の公達教も盛卿を見るかげもない此若狭が僅に狭き家の内御不自由な御住居さぞや悔しう思し給はん、苦を見せます胸の内泣ぬ日進はござりませぬ、と

なみだぐめば敦盛卿今更悔むも愚なれども平家の榮花も天の責源氏の武士に追立られ都をひらく西國へ落行給ふ人々に、遅れし不覺は我誤り甲斐なき此身をおことが心勞死でも忘れぬ夫婦の衆いかに苦勞をかけるものと宜ふ内にはらゝと涙先立見へ給ふ、若狭ははつと忝涙妻も漸泣目を拭ひ、ア、御勿体ないまいかに時世と云ながら冥加に餘る御仰いづぞやあなたをお供して戻られし若狭殿大恩の有平家の公達今ぞ御恩の報じ時おのれやれと思はれても根が賤しい町人の年寄て役には立ずせめて娘の桂子が男に生れて來たならば戦場の御供しとお馬の口を取らそうに二人が悔んでおりまする、ヲ、今あれが申ます通り祈てもあせつても

どふもしよ事がござりませぬど女義ならぬ身を女子に仕立なされも付ぬ下主仕業勿体ない共いたはし共それがと、云さして右と左りに御顔を見上見おろし夫婦が節義餘所を憚る忍び泣敦盛卿も落涙の暫し詞もなかりしが、斯成行も平家の不運卑怯未練に世を忍び生ながらへる所存はなけれど、一ト度須臾へ立越て潔よく討死せんと、是今生の我願ひとても斯ても消る身と覺悟極めし事なれと思へば、淺間しや、參議經盛の末子無官の太夫敦盛が行末哀れと思へやと拳を握り御落涙ヲ、お道理とばかりにて又さめと夫婦が涙にやめ兼たる折からに、小萩さんは何所にぞと娘が聲に立退若狭小萩になつて、イヤ申今暫らくの御辛抱近々

須磨へ御發足の御祝しを申さんと私
が手仕業に、折かけし陣扇未廣がり
を差上たし、大事の御身かんまへて
氣取られぬ様と云ひつゝ立てそらさ
ぬ顔、コレゝ店は小萩に任して置
てそなたも暫く休足しや、おれも奥
にて一休みサアゝ來やれと打連て
夫婦は一間へ入にける暖簾をそつと
娘の桂子思ひ有身は今更に、立寄沙
も夕風や胸のさゝ浪押しめ、コレ小
萩様お前はそこにさつきから何遊ば
してござんすへ、と恥しそに寄そ
へばヲ、桂子様とした事があなたは
爰へ、いつの間にアノわたしや最前
からイヤアノたつた今がちよつとあ
なたにお目もじが仕たうござんす、
ムーそしてマア御用向とは何事でご
ざりますと聞かけられて道にも振の

袂に聲覆ひアノ其用事とはな、エー
つんともう一体マアあなたはほんの
姫御ぜでござんすかへと云れてはつ
と小萩が吐胸赤らむ顔にもぢゝと
是はマアあられもないお尋恥しなが
ら私は女子も女正眞の女子でござん
すはいなサアそふおつしやるは御道
理なれど先程のお詞に参議とやら無
官とやらア、コレめつそうなホ、ホ
、ホ、其様な事云はぬものサア云
ぬはいふに彌増る今は日影の御身の
上お包み有るは無理ならねど初春こ
とに爺様が祇園詣での道すがら連て
お歸りなされた時見れば見る程きつ
として又可愛らしいお姿にふつと私
が心の迷ひホンニあなたが殿御なら
何ばう嬉しからふにと朝な夕なの起
臥に私が心は空蟬の折々聞で吹給ふ

笛に合せて爪琴も妻乞鹿の心地にて
したふ心の通じてや清き流れの男御
ぞと聞て心は飛立ど賤しい此身に及
ばぬ戀路結ぶ妹背の神有らば、願ひ
を叶へて給はれとしづと寄添ふ品形
桃と櫻の色くらべ、花に露置風情な
り敦盛卿は默然と暫しいらへもなか
りしがやゝ有つて詞を改めホ、せつ
なるそもじが志今は包むによしなけ
ればいかにもおことが推量の通り無
官の太夫敦盛なり我も岩木に有ね共
源平互ひに鎧を削り、斯亂軍の世の
有様若狹が思わく一門の開へを憚る
折から成は、又の逢瀬も有べけれ必
ず恨み給ひぞと道理を分ての御詞何
と答も娘氣にわつと泣出す口に手を
當ヤレ音高したしまれよとは云ひ
ながら夫程迄思ふてたもる嬉しさを
他所に見なすも本意ならず、二世の
かためは叶はず共笛に合しておこと

が爪琴通ひあふ夜の有ば連理の契り
は笛竹の音に打とてせめて思ひを慰
めんイザ來られよと宣へば嬉しい様
でも落付ぬ胸はしんきのもつれ髪亂
す所跡を取りつくり引添てこそ入
ける。

(床本) 扇屋の段 (切)

深編笠に世を忍ぶ、浪人めけ共尾羽
をも枯さず、一きわ目立田舎侍若
狭が店を差脱き誰頼まん、扇所望致
ひたしと腰打かくれば若狭は立出、
小腰をかどめ傍に寄、エ、扇は何が
お望でござります、丸骨角或は煎骨
加賀と申も有、地紙は又金地銀地蒔
砂子、墨繪彩色小紋形、お好有らば
時の間に、折立ても差上ます、ソレ
お茶もてと應答、ム、成程扇の品々

承る、何れも所望はなし、身共が
望はアレア、折かけし陣扇が求たい
上京いたさば調へくれよと、傍輩に
頼れしが、ドレお見しやれと手に取
上、ム、陰陽の骨數よし、朱の丸銀
の丸や是もよし、心覺の圖に合イ申
ス、眞此様な陣扇必と頼れ申いた
り歸國も早明々日、幸ひ見かけし此
扇ヤナニ亭主是を所望が致いた、
エ、成程お望なれば差上たふはご
ざりますれど、其扇は去方よりのお
詔へで、今日の暮迄にお渡申等寸
分も違はず明日中に折立、御歸國の
お間に合せませふ、其扇はこなたへ
と云を打消、テ扱よふおじやるは、
是非に所望申へい、アイヤ夫は、夫
とは、ハイどふ有ても其扇は、お
詔への方へさし上ねば成ませぬ、ど

ふぞお赦し下されと辭退所望の其折
から奥に、吹出す、笛竹の、音色
しく聞ゆるに、若狭は驚き、ア、コ
レ何故に晝日中、笛を嘘まい、エ、
どんな、よその聞へも憚やとあせ
れど、留に行れもせず、立たり居た
り氣はそどろ、こなたは笛に聞入有
さま、餘音翫々として或は、亂れず
或は亂るゝ青柳の藤が如く、慕ふが
如く、笛に合して、爪琴の、音色
しく、秘曲の調べ、買人は小首打傾
き深意を、すます計なり、折から屈
強の捕手數十人土砂踏蹴立かけ來り
若狭が門を迫取かこみ、平家の落人
無官の太夫敦盛、此家に忍び隠るゝ
よし、阿根輪の平治が召捕に向ふた
り、尋常に渡せばよし、異義に及ば
ず踏込で召とらん、何とくと呼は

れば、家内は笛のひい共云ず色を失ひ見へければ、買人は立ち立端なく氣の毒ながら此場の次第、見るも後覺落居の内、暫く爰にと田葉粉盆提て店へぞ片寄ける、若狹はとつくと思案を極め、扱々は思ひも寄ぬ御難題、御覽の通り間所もなき、手塚が住居、左様の貴人を隠し置べき所もなく、定めて夫は門違、外を御詮議なされよと、云せも立ずヤアだまれぬかすまい、右大辨重虎公、兼て汝に心を付、忍びを入れて窺ふ所、只今嘘た笛の音は、青葉といふて敦盛が秘蔵の銘笛、外に嘘者誰有ふ、サア是でも已あらがふか、重虎公の仰は錦倉殿の御説同然、ソレきやつ路飛して家内を捜せ、畏つて捕人共、長持戸机二階の隅々、残る方なく捜せ

共、更に有所は見へざりし、阿根輪いらつてヤイ若狹め、顔のはげた女め二三人、此平治が見付て置た、敦盛は公家女弱女に化て居ようも知ず一々爰へ呼出せ、どこもかも引まくつて、とつくりと吟味すると、云を若狹が聞咎め、ム、敦盛を見知ずに詮議なさるゝ阿根輪殿、ヤア小しやくなひんこ親父め、見知ふが見知まいが役目を請た阿根輪の平治、北面武士の身分成共、追付大名に成わい小言吐ずに女原、きり／＼是へ引出せとせり立られて若狹が當惑是非も納戸を差覗き、コリヤ女共、こわい事も何にもない、阿根輪様の目通りへ、早ふ／＼と呼立られ暖簾の内よりふくれ顔、おりくを先に女子共おづ／＼として、座に付ば、ヤイ汝等

は誠の女か、敦盛が似せては居ぬか今阿根輪が見分してやる、是へ來よ／＼、つゝと寄／＼、エ、コリヤ顔をぐつと上る、ム、ヤイ敦盛ではない、誠の女の證には、咽笛に御様がござらぬわいハ、よいは詮議は済だ立てうせふ、ソレ次の女め、身が前へ出おらふ、アイとは云ど立兼る腰の廻りの太り肉、急なお間には愛染明王、摺はがしたる如くにて、阿根輪が前に立はたかる、平治は顔をとつくと見、ハ、ハ、アハ、アハ、此顔わいハ、ハ、ハ、ヤ是も敦盛でないエ、厚皮顔な女めと、にらみ付られ、むつと顔納戸へこそは走り行ヤア此外に見付置たる女郎一人、出ぐすみするは心得ず夫扱し出して引立來れ、ハツト答て數多の家來、そ

こよ愛よと欠廻り、女郎め、うせふと手を取を、引かづいて頭轉倒、ヤア女に似合ぬ傷は、彌以て胡亂やつ、取逃なと惣々が、小萩を中に取巻て、引立ゝ漸に、阿根輪が傍に引居れば、若狭はハアゝゝ氣をあせり、今ぞ一世の大難と、吐息つくゝ見て取平治、小萩が手を取顔打詠、鉄漿黒々と薄化粧、折人に似合ぬ手足の尋常、殊に今の側立、イデ懷を吟味せんと差込手先を振放し只一つに仕給ひしが今現はしては武門の恥辱、勿論若狭が難義とならんと、胸をしづめて手を仕へ、イヤ申敦盛様の御吟味とやらんに付、思ひもよらぬお疑ひ私しや女でござんする、夫じやによつてホンニゝ取しい事ながら、云かはした大事の夫

サア其大事の人ならで外の殿御に此肌を見せる事は成ませぬ、どふぞお赦し下されと、立んとするを引とらへ、ヤア拔々と其手は喰ぬと無駄に肌へ押込腕、身を捻もがきあせれ共こなたは放さぬ傍若無人、詮かた盡て見へたる所に、以前の侍つゝと寄、阿根輪が腕もぎ放し、骨もひしげと突飛し、女を圍ひ立たる有様思ひがけなく若狭が悦び、嬉しさ譬らん方もなし、平治はくわと眼をいからしヤア慮外千萬、詮議有女をかばゆ、名有身共を手ひといにナ、なせ合せた、サレバサ先刻より承はれば、今日の詮議は無官の太夫敦盛の事ならず、や夫に何ぞや、よしなき女を改め立、アレ御覽ぜアノ女、敦盛に極らば、手柄共云つべきが、

見らるゝ通り齒を染て、主有女と斷るに、うかつに肌へ手を差込、不義者成と惡名付ば、お手前は何となさるゝ、殊に追付大名にお成なさるゝとの事さすれば猶以て大事の御身分そこを存して其元の、お爲を思ふ身共が寸志、一禮も有べきに、却てお咎めなさるゝは、イヤハヤ近頃迷惑千萬ハ、と嘲笑ふ、ヤア云まいゝ、そりや咎られ云謂といふ物さ人の非を亂す程、武士道を磨く其方かぶつた笠取、かつつくばつて名も名乗、其うへでなぜ云ぬ、エ、不左法者めときめ付れば、ハテ小ざかしくも咎めたり、某が腰をかむるは、一に大君二に神所、主君と仰ぎし御兄弟、イヤモ其外は蠅虫共思はねば、腰かゞめ左様ござらぬ、笠取

ず本名も明さぬは、畢竟そちが爲なるわいと聞て阿根輪がむくりと起しヤアコイツガ、素浪人の分際で云して置ばヤレほうづもない、コリヤ誰有重虎公の御内にて、人も知たる阿根輪に向つて、細虫とは案外の雑言、サア假名を名乗、實名聞ん時宜によつては手は見せぬと鐸打叩き詰かくれば、ハ一望ならば何より安し、耳をさらへて能聞、ソモ坂東に去者有と、兼て音にも聞つらん、我こそは武藏の國の住人、私の黨の旗取、熊谷の次郎直實成はと、笠かなぐつて投捨る、肝中尖くぬめ付られ、阿根輪の平治は氣を吞れ、若狭もハツト胸に釘、又氣遣を重ねしは鷹に迫れし鶴鳥の鳩失ふ心地せり、愕りしながら負ぬ顔、ム、扱は貴殿

が熊谷殿よな、ヤ幸の所成ば、敦盛が評義お渡し申、拙者が見る前只今急度詮議召れ、但し一門の有所知共見遁せと有鎌倉殿の御説ばし候かイヤハヤ、東國武士は手ぬるしと聞もあへずだまり召れ、見赦せとの仰もなく又扇屋迄詮議せよとの御説も請す、此熊谷と平家の出合は一の谷の戦場成共、京家の武士に手ぬるしといはるゝも何とやら、ヤイ若狭今聞通の時宜成ば、隠す逆遁るべきや、平家の落人敦盛を扇の折人などと偽つても、此熊谷が一目にらまば安穩に助け置べきや、其女には構ひなし、外に隠し置たナソレ敦盛が有ぶがな、アコリヤ狼狽な居居る居ずば居ぬとサ眞直に云おらふと餘所に知せて情の詞、ハア熊谷様の事

を譯ての御仰、遁るゝだけとは隠し忍ばせ参らせしが、拔差ならぬ此場の有様此上は力なし敦盛卿をお渡し申さん、暫くお待下さるべし、小萩こちへと手を取て、泣々い奥へ入ける、後に平治はうつとり顔、熊谷傍に差寄て、イヤナ阿根輪殿、先刻一寸承はれば、右大辨重虎公の仰は、鎌倉殿の御説も同然との御意イヤハヤ珍説の御説此旨具に鎌倉殿の御耳へ達すべし、御歸宅有は重虎公に、宜しく仰聞られよと云れて大きに敗陣し、コレハ東國の武家方はイヤモ去連は物贗の強い事、夫はアノエ、彼若狭めを感の爲、ふと口へ出ほうだいに申た事、御上聞に達しては、イヤモ大分迷惑、必此事御沙汰なしに、コレサ、熊谷殿、

男は當つて碎とやらハ、只幾重にもコレサ開流にといへど熊谷空うそ吹奥を氣遣ふ折こそ有、南無阿彌陀佛の露語共ばつたり討たる太刀音に、直實思はず立上れば尻居にとつたり阿根輪の平治、うろくきよろつくばかりなり、主若狹はしほくと、包みし首をかき抱き、熊谷が前にさし置き、ハア、遁るゝ方なく、いたはしながら敦盛の御首を給はりし、イザ御受取下さるべしと、泣々首を差出すと挨拶もなく阿根輪の平治首取上て打詠、ナニ熊谷殿貴殿吟味召れたからは、敦盛の首に相違は有まい、熊谷さらばと缺出す刀の鏑しかと取、どつこい其手は喰べいかと引戻して首もぎ取、二三間投飛され死入計の痛さをこらへ、ヲ、敦盛が

首見届け申た、最早用事も相濟からは家來、來れと云捨て後をも見ずして、立歸る影見送つて治郎直實、コリヤ若狹汝にさせる縁もなく又仇もなき熊谷成共阿根輪が聞前武士の意氣地、其儘にも差置れず、隠し有ば出せと云ひし我詞を、遁れぬ所と思ひ詰、切たる首は汝が子イサ此首敦盛といふ事は、一ト目見るより、ア、町人も弓取も、義理程つらき物はなし、ソレ其敦盛の御首に、縁の人も有やうす、見せて名残を消ませよと、身を捻向けて情の詞差うつむきし親若狹、心のたるみ取亂し、女房ふと云聲に、としや遅しと母親が、小萩諸共轉び出、あへなき首を拖き上、コレイノコレ娘、はかない身になりやつたのふ、浮世の義理と

はいひながら、親の手にかけ此様に殺さにやならぬといふ事は、餘りむごい親父殿と、もだへ歎けば爺親はヲ、道理じや〜道理じやはいやい最前途方にくれて居た所に、娘が傍に居てイヤ申と様、お前に大恩の有平家の公達、敦盛様のお身代りに私を切て下されと、首差のべた其健氣さ、ヲ、能云た出かした、何ぞ云たい事が有なら、遠慮なしに云殘せと、問ふおれが氣は夢現、手を合して云おるには、心にかゝる一つの思ひ、恥しながら敦盛様に、せめて一夜の添臥して、妻よ夫と云れて死だならと後いひさし、顔を隠した其時は、おりやむねが張裂様に〜エ、有たはやい、コリヤこらへてくれと雨やさめ、母は正躰むせ返り、今朝

のけさ迄此様なはかない別れと云事を、しらぬ凡夫の淺間しや老少不定と云ながら、斯した愛目を見るならばいつそ片端な子を持たら、今の歎は有まいに、眉目も形も揃ふたる、死顔迄もにこ／＼と、物いふ様に思はれてわしやたまらぬとどど伏あへなき首を抱しめワツト叫びて取亂せば、敦盛卿もいと猶身につまさるゝ御落涙、餘所に見る目の熊谷も恩愛の心察しやり、鬼を欺く兩眼に、たもち兼たるはら／＼涙、なみだなみだは五月雨や水かさ増る、加茂川に砂石を流す如なり、悲歎に沈む敦盛卿御涙を拂はせ給ひ斯成事と知るならば、仕様模様も有べけれ、翌をもしれぬ我命、なま中情の契りをはけるは、後の歎を思やり、わざと冷

情もてなせしに、我に代つて不便の最期ノウ夫婦の衆、人の妻に定る時は、鐵漿にて齒を染るとかや、今改めて敦盛が妻と定る此桂子、是が夫婦の證ぞと、傍成硯引寄給ひ、涙に墨は薄くとも思ひ白齒を染筆や、深き契りは冥途にて、半座を分て待給へと首かき抱きしほ／＼と、橋際近くあゆまるゝ、夫婦も共に御後を見送る熊谷直實は、口に稱名表には勇氣たゆまぬ武士の、哀れを見捨出て行東の山の月代も、名にし五條の大橋に照添川の汀迄、敦盛卿はしづ／＼と、立寄給ひ目を閉て、いかに桂子未來を契る水盃、手向の露は、此川の清き流れに、弔はんと、盡ぬ名残の、御涙又も落泣し給ふ折から、さつと吹來る風に連、忽ち、鐘太

鼓、敦盛耳をそば立給ひ、アラ不審しき貝鐘太鼓、池邊ならずと屹度目を付、瞬もせずおはする所へ、駒を早めて治郎直實一文字に駆來り、敦盛夫におはするや、遠音に響く鐘太鼓は正しく君を取圍む、重虎なんぞの所爲ならん、熊谷是に有中に、一先此場を落給へ、早く／＼と制する直實、敦盛は默然と思案にくれて居給ふ所へ熊谷の郎黨青山軍次息を切て驅來り、須磨の浦への發足は明々日の陣ふれ成共、敵に變有忍びの内通、御大將は浪花津の、三つの濱より御乗船、御用意有て然るべしと息突あへず言上す、ホ、兼て期したる一の谷、待もふけたる出陣と、着せし上着脱捨れば、下には用意の小手脚當、勢ひ込たる其出立實私黨の旗

頭とゆゑしくも又いさましく、味方
の變は氣遣ひと、敦盛卿も氣をせき
給ひ振の袂袖かなぐり給へば下には
腹巻金覆輪の揚羽の蝶、眞紅にから
みし小手のひも、手早に繕ひイカニ
熊谷、平家の方に隠れなき、無官の
太夫敦盛が首、取て手栴にせよ、イ
ザ一勝負と待給へば、治郎直實遙に
見やりかんら、ハ、ハ、ハ、からと打
笑ひ、ハテ面白し去ながら、思ひも
うけぬ大將の、御名も假の小萩と共
若狭の家に散殘る、舊の花の散ぬ内
早御立と進るにぞ、辭するは却て弓
矢の名をれ、ノウウゝ熊谷、今日の
情の返禮に、出陣の餞別せん、以前
の陣扇取出し、はつしと打ばしつか
と請留、ホ、ハ、ハ、速なる君の賜、我
も平家を追討の義經公より給はつた

(西國) 間日一十七日九月十

詰北橋大島堂阪大

社務式株行興竹松 元進動
合協廣相本日大 費協

場来阪大士力新様相大京東



一步銀十五 等四三二 は日初
二切月 一等・特
(〇三物小)

四	三	二	一	露
小	小	小	小	料園
五	五	五	五	
〇	〇	〇	〇	
〇	〇	〇	〇	

示強師乃靈練犬鋭力敵
業老古老美俊強無
大
對馬口四
定門清
室の力
み給
の力
を川昇岩山川錦

猪名川内の段

猪名川内の段

と遣阪名ヶ
わい屋川嶽

竹本 文字太夫
竹本 相生太夫
豊竹 富太夫
竹本 津の子太夫
竹本 伊達太夫
鶴澤 友次郎
鶴澤 鶴太郎
弓(鶴) 友駒

お名々阪遣
と
わ川藏屋い

吉田文五郎
桐竹政龜
吉田幸市
吉田玉兵衛
吉田次

人形

大阪の商人錦屋禮三郎が新町大阪屋の遊女錦木に溺れ、悪人庵右衛門、九平太、鐵ヶ嶽等の奸計にかゝつて窮地に陥つたのを、禮三の最負力士猪名川夫妻の俠氣によつて錦木の身請けを濟ませます、一方近江の藩士三島彌太夫の女お才は計嫁のある身で禮三と私通した爲めに勘當されたのを千田川に隠まはれます。錦木は猪名川の女房おとはに對する義理で再び茶屋奉公をする身となり禮三は鐵ヶ嶽を斬つたゝめに前途を悲しみ遂に錦木と情死まで企てましたが結局人々の盡力で目出度納まるといふ

筋合で、この猪名川は、鐵ヶ嶽の條は、
明和の初年に南堀江に勧進された江
戸の相持稲川と大防藏尼敷の抱え力
士鐵ヶ嶽との間にあつた事實により
取入れて脚色されたものであります
この作は全九巻續きでこの段はその
二巻目になつてゐます。作者は近松
半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の
合作です。

ゆかほん
(床本)
な がはうち
狩名川内の段
だん

芝居は南、米市は北、相撲と能
の常舞臺、堀江くんと國々へ、鳴り
響きたる猪名川が、角力の内は夫婦
連、爰に堀江の僑住居、店は初日の
飾り物、半紙、毛氈、煙草盆、羽織
脇差、取柄、酒は松葉へ米飯、餘所
の軒端をかり初の賑々しくぞ見えに

ける。詞扱積んだの、見事じや、何羽織、脇差米もあり、えらい張込じやの、イヤ又三年こつちの相撲にめつたに負けた事のない猪名川。シタガ今度の相撲には、千田川が病氣ゆえ、はづむまいと思ふたが、思ひの外きついはずみ。ソリヤ其筈いの勧進元の顔はよし、江戸方九州方残らず上り、猪名川といふ最負のつよい、力の強い、あんな男を持つ者の顔が見たいと表から、内を覗いて高々と、夫の噂女房おとは、出合頭に聞く嬉しさ、顔に少し紅桔梗、前垂の紐縄暖簾、上げてにつこり。詞北野屋七兵衛でござります。オ、是れは、島の内の七兵衛様、よふお出、サア、此處へと打ち通り。詞扱マアきついはずみやう、千田川

が出ぬ故に、どう有らふと思ふたが近年の大入、今日の大方こゝの關取が、とらしやるで有ろと思ふて、見物に來たついでながら、ちよつと悦びに寄りましたが、關取はまう往てかへ。イエ、今日は叶はぬ用事につき、つい近所まで參られました、まう戻つてござんせふ。ほんにマア日外はいかいお世話で、練物を緩りと見物致しまして、忝ござります。何時でも島の内の祭は、俄が多うて賑かなこと、わたしらは在所者故、物見高いとモゑてはこちのに呵られます。イヤモこちらの方も門がざわつく許りで、奉公人が動かねば、肝心の商ひが少ない。ヤ斯ういふ中に遅なつたら這入れまい、關取へよい様に頼みます。と座を立上

れば、オ、忙しいマア、御緩りと成れませ。イヤ遅いといふ場がござりませぬと、挨拶そこへ歸りける町中の最負に肩も猪名川が、鐵ヶ嶽陀多右衛門と、打ちつれ歸へる我家の内。詞オ、こちの人戻らしやんしたか。陀多右衛門様ようお出、初日からまだお目にかゝりませぬがきつい大入で、お目出たうござります。アイそりやモウ互ひでござんす。見物の足が早さに、そろゝ行かふと出かけた道で、猪名川に逢ふたによつて、それでちよつと寄りました。それはマア、ようこそお出、シタがまだ漸と今の先、櫓太鼓を打出しました。マア緩りとお茶なりとものと、會釋に派出す花香より、心の花香ぞあいそ有り。詞コリヤ女房ども、留

守の内へ、今日の角力割はこなんだ
 かい。エゝゝまだ何にも持つては。

ハテ埒の明かぬ、今まで知れぬは何
 ぞ紛紜でも有かいの陀多右衛門。サ

アおれも初日に、鈍な角力を取つた
 によつて、何でも今日とは思ふて居

るが、誰と合すか相手によつては、
 魂膽も工夫もして見にやならぬ、い

つそ聞にやらふかい。ハテマアよう
 ごさんす。其内には持つてきませう

幸ひ貰ふた肴も有る、主と一所に飯
 上つて行かしやんせ。ドレ拵へうと

木綿褌、かけまく神に有らねども、
 菩薩廻りの女房は、勝手へ立つて入

りにけり。詞猪名川様お宿にござり
 ますが、新町の大坂屋からまゐりま

した。佐右衛門と申します。錦木太
 夫が身請の跡金、今日中に遣はされ

ませう、ちとこちらに身請の客衆が
 ござります故、其方へ相談いたしま

すが、お前のお顔を立まして、今日
 中は待ちます。翌日になつたらちこ

らの太夫をやります程に、その時意
 地無地のない様に、念を入れいと申

されましたと、いひ捨て使は立ち歸
 れば。詞ヤア其身受外へさして、猪

名川が立つ物かと、かけ出すを。詞
 コリヤゝ待て、其身請の譯も其客

も、此鐵ヶ嶽がよう知つて居るほど
 に、マア行かずともよいわい。わい。

ム、すりや其身受の相談を、われが
 よふ知つて居るか、シテ其身受の客

といふは。イヤ外でもないおれじや
 オ、此鐵ヶ嶽陀多右衛門じや程に、

マアさう思ふて貰ふかいと、俄にこ
 つきもふしくれ立、頬髭撫でゝのさ

ばり顔。詞ム、聞えた、コリヤ九平
 太が腰じやな。もつともわれがため

には大事にかけにやならぬ人じやが
 爰をよふ聞いてたも。あの錦木太夫

は、おれが親方禮三殿とは、モきつ
 う深い中じや、其錦木ゆえ勘當迄、

請られた事、コリヤモウ云はいでも
 わがみよう知つて居やる事じや、そ

こらはまあ取つてほつて、五百兩と
 いふ金迄わたし。跡金の二百兩才覺

する其内に、太夫殿を外の手へ渡し
 ては、どうもおれが顔が立たぬ。わ

がみが仲へ這入つたこそ幸、どうぞ
 こつちの身請を、じやみさす様にい

ひ廻したもるまいか。ヤコレ鐵ヶ
 嶽頼むゝと詞を下げ、事を分けた

る一言を、鼻であしらふ悪者作り。
 詞オ、此身請は、どうせうと斯うせ

うと、俺がまゝじや、汝が頼む様に
してやろといふたら、勝手は可から
うがマア厭じや、わりや惠海庵で、
九平太様をひどい目に合はしたげな
オ、つよいこつちや。其仕返し
を頼まれて居る此鐵ヶ嶽、あんだら
くさい事いふない。ム、すりや其時
の事が根柢になつて、それ故身請の
邪魔するの。か。イヤ邪魔するとは、
何のこつちや。錦木が身請は金
づくじやぞよ、僅か二百兩ばかりの
跡金、厚子の喉に詰つたやうに、ぎ
ちかはくと、吠へ面かはくとは違
ふて、七百兩といふ金をがらりと出
して身請するのじや。なる程もつと
も。とかく銘々親方を、大事に思ふ
から起る事じや。ガナント斯してた
もらぬか、どうぞ俺を、九平太様へ

連れて往て、あなたの胸の晴れるや
うに、打たしなりと又踏しなりとさ
して、身請は此方へさしてたも。モ
わがみのいやる通り、金づくの事な
れば今日中に跡金さへ、出来れば頼
む事も何もなければ、サちつと急に
は出来にくい。尤も在所へいふてや
つたら、上面の出来る事も有うが、
親共の耳へは入れとむない。それで
わがみを頼むのじや。又折角身請仕
やつてからが、とても太夫が九平太
様の、女房にやならぬ、スリヤコレ
畢竟が費えと云ふ物じや。黙りあが
れやい。太夫が随ふが随ふまいが、
それや構はぬ、九平太様にや金が澤
山有る。サ小判が澤山有るによつて
其金でわいらが面をはり廻すのじや
サイノ、金で面をはらずとも、此猪

名川をどうなりと、腹の癒る様にし
て、どうぞ身請をさしてたも、一生
の頼じや、恩にも着よ、コレ手を下
げる鐵ヶ嶽と、頭を疊に摺りつけて
頼む心ぞ切なけれ。詞ム、そんなら
何か、踏れても、擲たれても、わり
や言ひ分はないといふのか。イヤモ
開分けてさへたもれば、たとへ此身
はどうなつても。ム、ハ、ヤコリヤ
相談が面白い。あの九平太様の名代
に、マア一寸斯うせうかいと、立蹴
に挫と踏飛ばし。詞何じや、何じや
、何をびこく、さらすのじや。
エ、わりや唯た今、云分無いと云ふ
たぞよ、但し言ひ分が有るのか。イ
ヤサ、何の言ひ分が有るもので。有
るまい、何のあろぞい。惠海庵
での意趣返し、わりや九平太様を斯

う撃はしたか、ヤ斯う踏んだか、
 〳〵と弱みを付込む厄病の、髪も頭
 も引しやなぐり、苛責む折から表へ
 息せき。詞ハイ今日の相擧割でござ
 ります。まう追つ付け土俵入じやほ
 どに、早うお出なされませと、書付
 抛り込み立ち歸へれば、陀多右衛門
 拵抜き。詞何じや、鐵ヶ嶽に猪名川
 ム、すりや、今日の角力は。コリヤ
 見い、俺と汝とが角力じやとやい。
 ム、時も時、折も折、わがみと俺が
 立合とは、ハテ氣味合な事じやのと
 云ふも心に一思案。詞コリヤ、汝も
 池田の猪名川と云はれては、國々へ
 名の通つた者、又俺も大名のお抱、
 殊に大阪は初てなれば、此角力失敗
 るが最後扶持離れじや、すりやコレ
 二人ながら大事の角力九平太様の名

代に惠海庵の仕返ししたれば、此算
 用は済んで有る、が又錦木が身請の
 事は俺次第じや、オ、此鐵ヶ嶽が心
 次第じや程に、水心有れば魚心有り
 頼む事も頼まれる事も、マ今日の角
 力終ふてから、其上の事にせうわい
 汝も随分例で叩き廻して、俺に
 勝つ様にせい。したが可哀や、俺と
 取つては骨身が碎けて、重ねて土俵
 踏む事はならぬぞよ、何うぞ頭取衆
 を頼んで振り替へて貰ふてなりと、
 撲らぬ方が勝ちである。が夫ともに
 撲つて見やうと思ふなら、サ魚心有
 れば水心。ナ猪名川、土俵で逢はう
 と、強い詞の何處やらに、あちた鐵
 棒引き揃る雪踏、ぐわらつかせてぞ
 詞コリヤ猪名川、ソレ今いふた魚心
 あればナ、水心、必ず忘れて呉れた

よ、ハ、ハ、ハ、ハ、出でゝ行く。跡に
 猪名川諸手を組み、思案に暮れて居
 たりしが、詞段々日限の切れた跡金
 親方が催促するも、九平太が皆所爲
 とかく鐵ヶ嶽を抱き込んで、彼方の
 身請を延ばして貰ふより外はない
 と云ふても一筋縄では往かね奴、抱
 き込む仕様は、ム、太夫が身請は俺
 次第、魚心有れば水心有り。オ、こ
 りや今日の角力を、ふつて遣らざな
 るまいわの。ソレ、彼と俺とが
 立合ふこそ幸ひ、美しう振つて遣り
 彼奴に勝を譲つて置いて、其上で退
 引させず、頼むが近道上分別、とは
 云へ名取の鐵ヶ嶽、何う魂膽してな
 りとも、投げねば成らぬ晴れの角力
 云はゞ一生懸命の、大事の角力を金
 故に、振つて遣る猪名川が、心の内

の切なさ、汚なさ。摩利支天にも見放され、角力冥加に盡きたかと、思はず拳を握り詰め、身を顛はして男泣き、始終立聞く女房が、涙隠して。詞オ、此方の人とした事が、先行にから飯拵へて待つて居るのに、こゝで喰るか、奥へ据ゑうかと、何氣無ければ素知らぬ顔。詞イヤモ飯なら喰たう無い、ヤホンニ角力から呼びに來た、ドレ往て來うと立ち上れば詞コレ待たしやんせ、ソレ髪が強く亂れて有るぞへ、人中へ見苦しい結ふて上げふと取出す櫛箱詞イヤく結ふて居たら隙が要る、つひ撫付け置いてても。オ、お前もこんな髪して、行かしやんした事が無いが、いつその事、何も彼も云ふて聞かし下さんせぬか。詞ヤ云へとは何を

サイナ、お前の心のナ、それ纏れ髪撫で付けて置かうより、詞いつそさつぱり云はしやんせぬかと云ふ事いな。詞イヤ云ふまいく、なんぼ私に云へと云やつても、高が女子の手業、云ふたら大方後れが出やう、つゝ撫で付けて置いてたもと、傍に直れば女房も、押しては云はぬ纏れ髪鬘のほつれを撫で付ける、櫛の背より夫の胸、寫して見たき鏡立。詞サア可いか見さしやんせと、向ふ鏡の蓋取つて、寫せば寫る顔と顔。詞申し猪名川殿、色も蒼ざめ、そしてまあ、目の中も潤んで、何うやら氣色の惡さうな顔付、まう今日の角力へは斷り云ふて行て下んすな。詞何をあんだらつくすぞい、いつは兎もあれ今日の角力、鐵ヶ嶽と此猪名川

初日の出ぬ先から、町中が待つて居る晴の出合、何でも鐵ヶ嶽を土俵の砂へ埋まにや置かぬ。イヤそりや嘘じや、今日の角力は鐵ヶ嶽に振つて遣るお前の心。コリヤ聲が高い、スリヤ先刻にからの様子残らず。アイ一間で開いて居りました。僅な金に手詰つて、難儀さしやんすがわしや悲しいわいな悲しいわいな。いつそ此譯親父様に。詞白痴奴が、夫云ふ程ならば此様に、人に擲かれ、踏れはせぬわい、昔氣實の親父様、打明けて物云ふと。禮三様に異見の何のとやかましい。若いお人の水の出端若し命生害になつた時は、ナ、コリヤ千日に蒔つた蒼じやわい。ア、急な事でさへ無くば、工面の仕様も有らうに、僅二百兩の金故に、大事の

角力を振つて遣らざるまいと思へば、胸甲斐ないやら口惜いやらで、俺や胸が裂ける様なわい、オ、道理でござんす、もつともでござんすわいな。角力取を男に持てば、江戸長崎や國々へ行かしやんすりや、其跡の、留守はなほ更女氣の、獨りくよく、物案じ。夫に怪我の無いやうにと、祈る神様、佛様、妙見様へ精進も、戻らしやんして顔見るまで案じて夜を寝ぬ女房の、今この切なる苦しみを、連添ふ私に言はしやるせぬ、お前はそれほど難面と、女夫に成つた今までを、數へ立て、く、怨み涙に時移り、早追ひの呼使ひ。詞申し土俵入でござります、早うおいでなされませ、ちやつとくには是非もなく、詞女房ども、往てく



るぞや。エ、そんなら何うでも行かしやんすか。ホ、鎧ヶ嶽を拖込んで工面通り行きや格別、もしも行かねば絶対絶命。エ、コリヤこれが暇乞ひにならうも知れぬ。さらばとばかり一と聲を、跡に残して出で、行く。これなう待つて下さんせ、たつた一言言ひたい事、猪名川どのくと、見れども跡は雲霞。詞夫の命にかゝはる大事、コリヤ斯うしては居られぬと、帯引締めて夫の跡、慕ふてこそは。

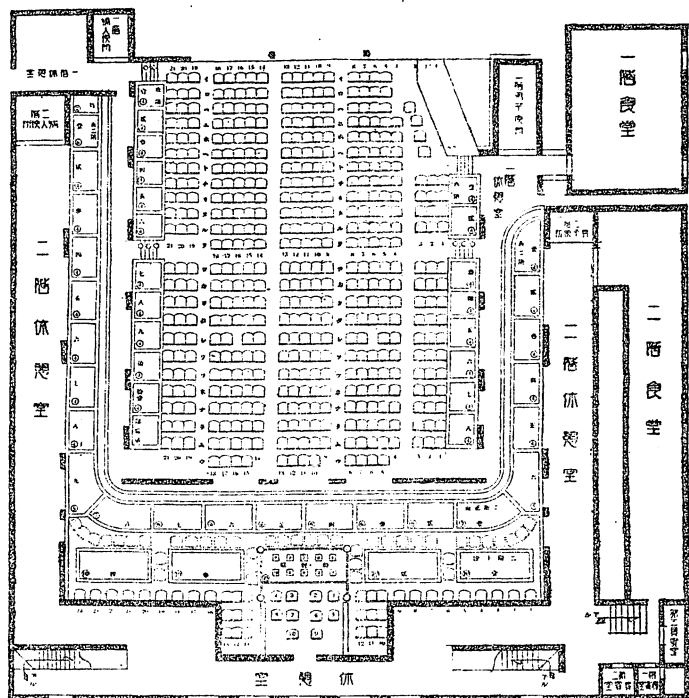


大及源池橋

茶屋

電話新町二二番

文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上
大部分椅子席になつて居りま
すからお一人でも御愉快に洋
服でもお樂に御見物が出來、
またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席・壹等椅
子席のお切符は五日前から發
賣致します、また五日以後の
お切符も壹等席に限り御豫約
申し上げますから上圖の座席
表に依つてお早く御望みの御
場席をお申し込みになればお
心のまゝにお好きな處が御自
由にとれます御用命の節お呼
出しの電話は

南四七一一番で御座ります

切符賣場右指定席切符は當日
前賣とも正面西側本家入口に
て發賣して居ります
二等席・三等席切符は當日正
面入口にて發賣致します

觀賞おほえ

昭和十一年九月 日

東海美女傳

玉藻前旭袂

極彩色娘扇

増補須磨都源平躑躅

關取千兩幟

毎度御愛顧を蒙り厚く御禮申上ます

本日は有難う御座居ました。開場毎に皆様に御満足して頂けるやう、御期待に反かね様一同努力致して居ります。

文楽座御使用に就て

同座も各種の御催し、例へば演劇公演、音楽會、舞踊公演、お渡ひ温習會、披露會、祝賀會、慰安會に御利用下さる様御願ひ申上ます。

諸種の団体御觀劇會

は直接御申込み下さいませ様御電話にて御一報下されば早速係員を差遣し凡ての御相談申上ます。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座います。

賣店は

二階東側及休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃へて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へ御預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。

御歸りは混雑致しますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます

お出口は

下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。

黒札は正面人口東側でお渡し致します。
貴重品は 各位にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券は

各自にお持ち下さいまし、切符に一枚づ、番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします
案内人へ 御祝儀お心附は堅く御辭退申上けます。不行届の點は事務所まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由に御飲下さい。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め、御諒願ひます

御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座りますから御使用下さい。ムシタオルはレットローション使用。

四ツ橋 文 樂 座

前賣切符専用電話 四七一 一番

電話 南 三〇三二番
三七八八番

昭和十二年九月十日印刷

昭和十二年九月十二日發行

大阪市南區久松門町八番地

發行所 松竹興行株式會社大阪支店

大阪市南區久松門町八番地

發行所 松竹興行株式會社大阪支店

發行所 鳥江 鏡也

大阪市西區土佐堀通一丁目十二

印刷所 永井日英堂印刷所

文樂座南一食堂

御食の事は御用は一幕前に御下賜命はばれ至極御便利で御座います



大阪で一番早起きの南一

御宴會にも

御家族連にも

料理は

南

一

大阪四ツ橋

南一温泉料理

文樂座南一食堂

電話南

75

三三三七
三三三〇
四二一一
番番番番